

彼は何處かへ去つてゐる。多羅尾はちよつと舌打をした。これだから詮方がない。今更居らぬと出はうものなら、目算がらりと外れて、實も蓋もなくなる。實に困つた男だと、當所なく四邊を見廻した。さうすると、向ふの電信柱に凭れてゐて、此方の姿を認めるが早いか、宛然子供のやうにトン／＼逃げて行く。

多羅尾は英國公使館前で追附いて、

「串談も可加減にしろよ。」と怫然として叱つた。

「あ、全く濟まん。」宮井は草原へ蹠んで、恥入つてゐる。

「何故さう怖がるんか、さア來たまへ。これこそ見ツともないや。」

「君、頼む。」

「何をだい、先度是非逢ひたいと云つてたぢやないか。」

「そら逢ひたいのだ、だけれども……。」と閉口する其の容體が餘り可笑しいので、彼は怒りもならずとツと笑つた。

淡い霞が葉櫻の茂みへ下りて、ぱつと明るい電車は荐りに往來してゐる。

人車や馬車も通る。薄灰色に曇つた空には鳥が群をしておた。近衛聯隊に

喇叭の音がしてゐる。多羅尾は緩くりして居れぬから、

「山邊に縛られてるんだらう、君。」と突込んだ、

「何有、少々約束があるだけだ。直接彼女に文通も面會もしないと云ふ。」

「そんな事だらうと思つたツて、情々厭になるな。だがそれツきりかい。」

「さうだ。」

「ぢやア來るさ。一體馬鹿げてるが、君のキャラクターに免じて許してやる。僕が介在してるから文句はあるまい。」と澄しきつて、彼は先に立つ。

宮井も引摺られるやうに續いた。

けれど彼の心中は甚だ穩でない、多羅尾の云ふやうな悪評が山邊に當るとは得思はぬから。彼女との誓ひを破るやうでは、どうも良心に咎める。それで宮井は一應彼女に交渉した後で、豊子に逢ひたいのである。

「多羅尾君、ほんとに濟まぬがね、どうか一週程待つてくれたまへ。……必然君の好意に報いるから。」

「煩いね。何でもまあ可いや。」

「可かない、茲で一週間や二週間後れたって餘り變らぬだらう。だから君、頼む。僕は約束を破つたり、他人に顔の合はせぬやうなことは出来ないから。」と力一杯で云ふ。

其れをふんくと風に受け流して、多羅尾はのこく歩く。宮井の足元は

次第に濫つて來た。ひよいと引込まれさうではあるが、背後から駈り廻まへてゐるやうな一種の威力を感じて、彼は戦々顫へる位であつた。

豊子は姥やを伴れて、門先に立つてゐた。二人の來るのを認めて、溢るゝ喜悅を漲らしたが、宮井が眞際に逃げて了つたので、又で突刺されたやうに思つた。で、多羅尾は彼自身の不快を抑へて、決して失望するには當らぬ。彼はすつと以前から逢たさ見たさに奔走してゐて、山邊に其の斡旋を頼んでゐたのだ。それで直接文通や面會をしないと云ふ條件附きになつたが、彼の性格として、其の約束を破る譯に行かぬから、兎に角一週間程待つてくれと荐りに辯明して居つた。何有彼が貴女を忘れるものか、其の内訖度やつて來るに定つてある。貴女も手紙を出すなり、彼の下宿が生花の師匠なのを方便に、遊びに行つてやつたら、どんなにか喜ぶであらうと、

色々慰め顔に入知恵をして、其の日は直ぐに歸つたのであつた。

## 六の一

花子の許へ宮井から長い手紙が届いた。其の主眼とする點は、多羅尾が鞍旋の勢を取つて、豊子を自分に逢はせやうとしてゐる。色々込入つた未來に亘る問題もあるが、其れは殆んど自分の介意する處でない。只會てお願ひしたやうに、自分は一度彼女に面晤して、舊生涯の絆を断ちたいのみである。どうか愛姉のお手を煩はして以つて、凡てに好結果を得たく思ふ。何分多羅尾は自分の非常な恩人であつて、然も思想の丸で違つた男だから、自分は頗る心苦しい。こんなことを云ふては、却つて疑はれるかも知らぬが、實は昨日大澤の門口まで連れて行かれて、辛うじて家に歸つた。其の

際止むを得ず一二週間の猶豫を乞ふた。それで自分は肉の誘惑に陥らず、愛姉に誓ふた事柄を破らずして、神に勝利の喜悦をなしたいと、祈るの餘り斯くは書面を記めた。就ては四五日の内に參上するから、其れまでに然るべく御熟考を仰ぐと云ふのであつた。

此の手紙を読んだ花子は落膽した、日外あんなに反對して置いたのに、豊子は意地悪く獨身になつてゐる。其れが彼女は氣に喰はぬやら、面憎いやらで、往復もしないでゐる位だから、到底こんな執持は出來ない。そら成程さういふ約束はしたが、些とも逢はしたくはなかつたのだ。それに斯う正面から切込まれては、噫、實に情ない失策であつた。多羅尾のやうな男が附いてゐるからには、結婚よ何よと騒いでゐるだらう。彼の剽輕な錦之助は豊子の肩を持つて、自分勝手な計畫を廻らしたに違ひない。すると何

ば利氣んでゐても、彼の人の心はどんなに變るかも知れぬと、花子はむしやくしや溜息ばかり吐いた。

夫れと同時に彼女は、悪魔に誘はれてゐたと思つた。いや然うではないと打消しも爲たが、すつと以前親密に交際してゐた醫科大學生が華族の令嬢をつ娶つた時のやうな悔しさを覚える。それから、米國で初中終手を引合てゐた日本の留學生に、或る日郷里に妻子があると打明かされた時と同じやうな嫉妬さが込上る。だから矢張怖ろしいと、彼女は蒼白な顔になつてゐた。

もう男は駄目だ、深入りするではないと初中終貶してゐながら、つい始めて會つた晩から空想に耽つた。あゝ云ふ意志の強さうな覇氣に富んだ男子を助けたら、随分大事業が出来らうであらう。生涯を俱にして見ても可い人

物だと、苟且に慕はしく思つたから、由ない罪を犯して、豊子を欺いた羽目になつた。こんな秘密がばつとならうものなら、それこそ大變だ。願くは、主イエスキリストよ、肉の弱きを憐みたまへと不覺睡を濕ました。けれど彼女は伏床に入つて眼を瞑ると、宮井の姿が隠現いて来る、胸の何處かで彼の聲がする。さア然うなると、只つた今迄考へてゐた悔恨の念は消え失せて、毎ものやうな情緒に囚はれる。自分の斯う思ふことは敢て罪でもあるまい。彼の人は最早断念してゐるのだ。でなければ、何もこんなに頼んで来る必要はないし、伊豆での時にでも、其の他の機にでも、自由に交通をしてゐさうなものだ。格別公の誓ひをした譯ではないから、門口まで行つて、逃げる筈はなからう。それにかう熱心に云ふてゐるのは、彼の人の頼もしい處だ。可愛らしい正直な性質なんだ。そらさうだとも、

一旦人格を無視された女に執着して煩悶したり、復讐を企てたり、下手感  
 つくよりか、薩張見限りを附けるが骨のある男の遺口だ。全體豊子が間違  
 つてゐる。此れは錦之助が加勢してゐるからだらうが、咎もない養子を離縁  
 して了つて、失意に苦しむ彼の人を彌が上に苦しめるなんぞと云ふ法はな  
 い。これだから未信者には困つて了ふと考へた。而して彼女は不思議にも  
 豊子に對する同情は起さないので、義務も責任も忘れてゐた。  
 翌日花子は學校の職員室にゐても、電車に乗つてゐても、奈何しやうかと  
 屈托した。流石に豊子へ濟まぬやうな氣がして、永らくの友情を蹂躪する  
 後暗さが感ぜられる。と云つて、今更仕様がなみのみならず、宮井と彼女  
 の間柄が厭に案せられて堪らん。豊子が意外な逆せ方だから、どうも無事  
 では片附くまい。既にもう何が起つてゐるかも知らん。そしたら、自分は

飛でもない馬鹿を見る。さアどうしたもんだらう？ 不如此の際出逢つたら、  
 夫れとなく話して見やうか知ら。——いや／＼そんな厭なことは、自分の地  
 位として出来ない。是迄多少は仄めかしたが、どうも今一息通じないのは、  
 思ひ及ばぬのであらうけれど、矢張豊子の美貌を忘れ兼ねてゐるからだ。  
 ……………など、曾て憐いだ例の少ない彼女が、日夜笑止な程苦悶するの  
 あつた。

其の内に花子の腦裡へは、何有満らぬ。あんな真裸の書生にラブするな  
 んてなしもんだ。今度來たら、嚴乎斷つて了はうと云ふ男性的な木地が  
 大分出て來た。が、彼女は三日目の朝學校へ往かうとしてゐる矢先、端な  
 く豊子の手紙を受取つた。さつと顔色を變へて鳥渡封を切つて、二三行讀  
 むが早い其の儘懷へ捻込んで、そは／＼玄關へ降る。見送つた千代野

は訝しさに、

「義姉さん、奈何かなすつたのぢやなくつて？」

「何でも可いから、早くお往きよ。初中終遅刻する癖に、お前達の愚圖には仕方がない。」とけんつく喰はして、玄關番に平素のさん附けを除いて、

「竹乃、竹乃、座睡ばかりしてゐると、用心が悪いよ。」と云ひ捨て、荒しく家を出た。

## 六の二

昌平橋行の電車は満員である。花子は席を譲つて貰つて、窮屈に腰掛けた。日頃此の函で明け暮れ運ばれてゐる顔觸は稍定つてあるので、中には目禮する馴染がある。兩側近くの新緑の樹立や、嫩草の土手には、愉快な朝暾

が當つて、淡い霞が蒸發してゐる。さうかと思ふ間に、電車は隧道を潜つて、四ッ谷、市ヶ谷、牛込と、毎も花子の降る驛まで直さ着く。其れから彼女は江戸川行に乗換へて、關口臺町へ向ふのである。此處のは餘り人が込合ふてゐなかつたから、花子は豊子の手紙を怖々披いて見た。

花子さま、嗚呼、貴嬢との交際は如何に長かりしよ。物心附きける昔より常に妹の如くいつくしみたまひて、計知れぬ御恩に與り申候。或る年は寒さ暑さを俱に避け、又或る時は月を賞し花を愛で、枕並べて寝ねにし夜も有之候ひき。さりぬるに、斯る玉章を差出さねばならぬ運命のうたてさよ。

承はれば貴嬢には、宮井信夫なる御方に三月の上旬親しくお出逢ひなされしにも拘らず、妾が同月の中旬に、一生の恥辱を打開けて、くさ

ぐさの御相談を願ひし時、何故素知らぬ風を装はれ候ひしや。申し悪きを根掘り葉掘り訊かれて、一言の慰めをも賜はぬのみか、却つて妾に虚偽の生涯を送るべく勸めたまひしお心の程世にも亦恨めしく存じ参らせ候。日頃やれ耶蘇教だの、泰西思想だのと、神聖なる愛を説き、高遠なる眞理を教へたまふ貴嬢に、妾の苦しさ悲しさの御了解なき筈はよも有之まじ。いえ、外ならぬ貴嬢がなか斯く冷やかならむやと、其の時より不審に驅られ居り候ひしが、日外丸の内とやらに睦まじく渡らせられし由、風の便りに伺ひて、さてはと合點仕候。且又是れでこそ、クリスチャンの御方様は幸福なれと羨しくも感せられ候ひき。さりながら、妾は何せ操の汚れし者に候ま、露更嫉妬がましくは存じ候はず、何卒、永久にアイデヤルホームをお造り遊ばされて、楽しくお暮し

なさるやう念じ入り参らせ候とは云へ茲に少々御尋ね申したき事の候一體人間は自他を欺きて善きものに候哉。クリスチャンは言行不一致の罪惡を尊ぶものに候哉。他人の自由を束縛する權威何處に有之候哉。何故貴嬢は宮井様が妾に通信若しくは面會なさらぬやうお止めなされ候ひし哉、一々御確答下され度願上候。多分賢明博識なる貴嬢も……、未だ五六行の文字はあつたが、此處で電車の終點に達した。花子は場所構はず眞赤になつて、何ていふ横着な書方だらう、失敬極ると吐きつゝ降りた。彼女の教へてゐる女學生も二三人一緒であつた。

「山邊先生、近頃餘程變ね。」

「さうよ。彼の手紙に屹度曰くがあるんだわ。すツかり目色が狂つてたもの。昨日の讀方の時なんかもあれでせう。」

「ぢや矢張失戀でうせか。」  
 「お、厭だ、彼の先生にそんな事があるか知ら。」  
 「そらあるともね、老嬢に失戀は附物よ。」  
 などと忸なく彼等は語合つてゐた。其の一町程先に花子はすたく歩いてゐる。濫い錆枯梗地の紋附を羽織つて、琥珀織の袴を穿いてゐる姿は、行く春の恨みが包み切れぬ風であつた。  
 彼女は辛々午前中持堪へたが、其れからは病氣だと云つて、缺勤した。豊子の手紙が如何にも癪だから、一番宮井の處へ往つて見やうと思ふのである。而して彼の行動を突止めない内は、立つてもゐても不安心で耐らん。彼の絶交状は多羅尾か宮井の入智恵に違ひない。——でなげりや、あんな酷い肉皮だらけの文章が彼女に書るもんか。——若し宮井が自分との約束を破

る爲に、こんな隠謀を企てたのなら、臍を噛んでも追付かない不覺だつた。そら自分も幾乎悪かつた。けれどこれほど侮辱される理由が何處にある。然も目下の女から、愛しやうと、戀しやうと自分の勝手だ。抑も夫のある身でありながら。姦通したがるのが間違つて居る。萬一是れが社會へ洩れたなら奈何ならうぞ、折角築上げて來た土臺も毀れて了ふ。彼等の事なら、遣りかねまい。名譽に係はる、信者の體面にも係はる、殺される、噫、悔しいッ、憎いと、花子は激怒するやら心配やら、胸の内が養え返へるやうである。  
 電車の中で彼女は段々怖氣づいて、餘程歸りたかつた。何うせ宮井は多羅尾か豊子からか、色んな情實を聞いてゐやうから、全然愛想を盡かしたであらう。——それにしても多羅尾と云ふ男は悪魔だ。——元々自分へさう



愛を持つてゐる譯ではなし、自分も亦餘り親切を盡さなかつた。初中終警  
戒ばかりして、冷淡に遇して來た。で、寧ろかうくだらうが、そんな人  
とは交際は出來ぬと、先を制してやらうかとも考へた。  
けれど宮井が滿更不信用だとも思へない。假令日頃の志望は遂げられない  
にしても、其れは最早どうでも可いから、若し彼が眞實の手紙を寄越して  
ゐるのなら、此際何とか方法を講じやう。あはよくば、彼等から引放して  
了つて、自分のものになくちやならぬと、一種の野心を抱いて、彼女は  
はら／＼溜池の停留場で下車した。  
空はぼんやり晴れて、風の穏な暖い日である。山王の森は黒々生氣に満ち  
て、自然の大勢力を出してゐる。往來の人々も皆此の愉快な五月を怡んでる  
やうであつたが、花子は俯向きつゝ歩いた。俥に逐立てられて、吃驚飛び

のいた事も一度二度あつた。すると向から外ならぬ豐子が彼女も亦悄悄と  
やつて來た。頭髮を銀杏返しに結ふて、白い花簪を挿したのは、下町邊で  
見るやうな娘風である。ぱつと明るい井桁の玉糸緋に、赤ッぽい友禪縮緬  
の帯を束めた若體裁の服装で、手には合羽に包んだ菖蒲の花を持つてゐた。  
而して兩方が蝙蝠傘を翳してゐたからでもあらうが、思ひに惱む二人は十  
尺以内に近くまで氣附かなかつた。  
花子は立縮む程慄然した。もう避けるに避けられぬから、急遽に傘で顔を  
匿して、嵐に向ふたやうな心構へで、突進まうとした。豐子も痺ます摩連  
ふた。其のはッしと睨合つた眼の色と云つたら、到底十年以上も交際つて  
ゐた女同士とは思へない。如何な名優にても眞似の出來をむない事實の悲  
劇であつた。花子は無意識に二三間走つてゐた。

さうすると後から、

「花子さん！」と豊子が呼止めた。

「何有？」と振り返りはしたが、相手の様子を見る丈の勇氣はなかつた。

「何處へいらッしやるの？」

「貴女こそ何處へ？」

「私？ そりや可い處よ、貴女のお好きな處だわ。」

「さう、絶交を申込んだ者に話懸ける馬鹿はないもんだ。」と辛々一矢を酬いて、花子は逃げて了つた。

### 六の三

花子は夕方遅く家に歸つた。病氣だくと無暗に當り散して、間もなく伏

床に入つた。其處へ時を移さず宮井が訪れたのである。

竹乃が怖々開う取次ぐと、花子は馬鹿ツと怒鳴つた。けれど流石に聲を密めて、

「不在だとお云ひ、氣の利かない。」と丸で受附けなかつた。

それで玄關番は彼を空しく歸らしたが、其の後姿が如何にも傷らしいかつたやら、花子につけく云はれたのが口惜しいやらで、彼女は千代野の部屋へ嘆しに行つた、其處では若槻が腹這になつて、彼女と無駄話をしてゐた。先刻ピアノを弾いてゐて、退却を命せられた連中である。

「ほんとに奈何なすつたのでせう？ 私、もう怖くッて仕様がなかつたのですわ。」

「え、千代野はさも困つたふうに眉根を擡めた。

「ぢや今来たのは宮井かい。宅に居つて、不在なんぞ酷いな。」と若槻が引取つて、相手になる。

「でもあれですから、……それは落膽したふうでお歸りなすつてよ。」

「ふん、時々やつて来るかい、大分様子が變だとは睨んで置いたが。」

「いえ、そんなでも、……ですが、毎もびく／＼してゐらッしやるわ。ねえ、千代野さん。」竹乃は黙つてゐる彼女を味方に入れやうとする。

「そりやもう何でも可いことよ。奥で鈴が鳴つてるぢやないの。」

「まア、姥やさんはどうしたのか知ら。」と呟きつゝ彼女は部屋を出た。

後で若槻は薄笑ひをしながら、

「何うだい、火の手が廻つてるンだなア。」

「おゝ厭だ。」と泣きたさうな顔になる。

「それとも河岸が違つてるかね、しつかり頼むせ。」と千代野の膝頭を叩いた。

花子は血管の破れぬばかりに神経が亢るので、近所の醫者へ催眠劑を貰ひに遣つて、辛やく藥の力で一夜を明かした。朝目醒めて見ると、平素そんな例はないのに、寢衣がしめ／＼濡れてゐる。頭腦は岑々するし、體は全體に倦いし、其の心地の悪さたら無い。而して間があると、忌はしい追想が起つて堪らぬから、學校は缺勤する積りで漠然家を出た。彼女は昨日鹽子にゆくりなく逢ふて、死に優る恥辱を受けたと齒を嚙緊つた。心に多少の希望さへなかつたら、あんなひげは取らないものを、むざ／＼敵に凱歌を奏させた。噫、口惜しい。二人はてつきり共謀して、自分を冥に掛けてゐる。是れが黙つて居れやうかと、何の思慮も廻らさず其の足で、彼女

は和田牧師を訪問して、宮井には云々の戀人があつて、恐ろしい罪惡を犯してゐるやうだから、相當な處分をせすばなるまいと讒訴した。が、牧師はそんなに速断しては酷い。其の内機を見て、忠告しやうと寧ろ冷淡に答へた。で、花子は一層氣を腐して、只管彼を遠ざけたいと考へつゝ歸宅したのであつた。さう云ふ矢先へ宮井が來たものだから、彼女は蜂拂ふやうに刃付けたが、或は自分の僻みでないか知らと、感せぬでも無い。其の感じは彼女を十重廿重に苦しめる強敵なので、花子はもう考へまいと工夫をして見た。けれど精神活動が始まると、依然苦しくツて仕様がなから、斯うぶらつくのである。

其の間に彼女は稍分別を附けて、何しろ昨日の讒訴は取消して來うと牧師の宅へ往く氣になつた。單にさうなつたゞけで、早や宮井の面影を腦裡に

描いて、埃だらけの道を構はず歩く。すると端なく「花子さん」と呼ばれたかのやうに吃驚して、洋傘を窄めるやうな連想作用を行つた。太陽はかゝ／＼照つてゐる。同時に豐子から愚弄された言葉がはつきり記憶に上つて、今までの思想は全然毀れて了ふ。貴女のお好きな處だわなんて、何か據なしに出る文句ぢやない。餘り動止を見る勇氣のなかつたのは、殘念の至りだが、日頃臆病な彼女の方が自分より遙に落附いてゐた。此れは何うしても宮井が接近してゐるに定つてゐる。でなければ、豐子の彼の態度が些とも解せないもの。縦んば其れを別問題にしても、あんな侮辱を蒙つたからには、最早彼と交際をするのは間違つてゐる。少なくとも自分の意志が許さない。噫、彼は惡魔だ、自分を沈淪に誘ふ蛇だ、何處かへ遠ざけにやならんと、幾度も考へた事を繰返して、花子は吐息をついた。

目の前に樟の大きな樹が立つてある。おやツと彼女は冷んやりした。此處は教會員某の住居で、此邊には昵近な人が澤山あるから、若し誰かにこんな様を見付けられやうものなら、奈何ならうと穴へでも入りたい程、彼女は精神上に空虚を覺えて、どきどきとした。折柄通りかゝつた空俵を備ふて、自宅へ逃げるがやうに飛ばしたのである。

姥やは裏の井戸端で洗濯をしてゐた。千代野も初子も夫々勉強に出てゐて、廣やかな家は悄然してあつた。花子は黙つて奥へ行つて、一寸姿見鏡の前に立つたが、ぐツたり其處へ坐つた。境遇が悪いから、こんなに苦しまねばならぬと、涙を流して潜々泣いた。けれど其の時不圖英語の諺のやうな句を二三種思ひ浮べて、幾度も胸で繰返した。就中「Aman's fate lies in his character, and not in his condition. (人の運命は彼の性格に横はる、而し

て其の境遇に非らず。)」の一句には甚く刺激された。嗚呼、意志だ、堅固な意志だ。自分は境遇に負ける筈の女ぢやないと、我れを勵ましつゝ書齋へ入つた。

すると間もなく竹乃が怖々來た。

「只今参りましてごさいます。」と或る郵便物を差出すが早いか退いた。

花子は愕然顔色を變へて、引裂くやうに開封した。改まつた用文章體で、墨黒々とこんなに書いてある。

謹啓、昨夜は参上甚だ缺禮仕候。さて小生曾てお話し申置き候儀に付、是非共貴意を得たく存じ候。間、今夕七時半頃若しお差支無之候は、御在宅の程懇願奉り候。實は小生此の件が多分に貴嬢を煩はすものなりや否や、聊か御機嫌麗しからざる體を拜し、非常に恐縮罷

在候。併しながら小生は敢て食言を成し、或は恩を仇に報ゆるが如き者には断じて無之候に付、心身の潔白を立證せんため今般表記の處へ轉居致候。こは重々鳥辭がましき申分に候へ共、萬一貴嬢は小生を特に愛したまひて、斯く……、果して然らば小生の至幸に存する次第に御座候間、何卒お心措きなく御面接下され度、書外は萬縷拜眉の上申述ぶ可く候、早々不一。

明治〇〇年五月廿一日午前二時。

宮井 信 夫、九拜。

山 邊 花 子 様。

## 十一

宮井は豫定の時刻に花子を訪れた。毎も何か御用でございますかと、玄關番に云はれて、びく／＼するのだが、今宵はさア何うぞと二階の座敷へ通された。やれ／＼高い関が跨げたので、一山越えたと云ふ思ひに落附いて、床の間に置いてあるフクシヤの鉢植を眺めた。其の錦色紅絞りの八重が無數に咲いた美しさは、宮井をして將に展かれんとする會談に成功を祈る心をも忘れしめた。實に綺麗だと飽かず歎賞してゐると、花子はトン／＼上つて来た。

「毎度何うも……」。宮井は額ついた。

彼女は真似程點頭いて、

「御遠慮なくお敷なさい。」と云ひつゝ皮蒲團に座る。宮井は漸く半分だけ敷物にのツかつた。

「先刻はお手紙を難有う、慥に拜見致しました。それでね、今晚は何も彼も私の考へを此處に神様がゐらッしやるとして、(と片手を振りながら)お話し爲ますがね、それよりか第一貴方は何と思つて、お出でなすつた？」

先づ其れから伺ひませう。」と傲慢無禮な詰問である。

宮井は餘りに意外なので、ぼつと氣が遠くなつて、頓に返答も出来ない。決してこんな責められる理由は無い筈だがと、幾ら考へても、薩張見當は着かなかつた。で、彼は備々縮み上つてゐると、花子は血走つた眼で對手の動止を睨み据ゑつゝ捲しかける。

「一體貴方は他人を馬鹿にして被居るね、そら私も最初は中々正直な方だと信用してましたけれど、何にも深く交際した譯ぢやなし、そんなに知らなかつたのですよ。……………それに始中終手紙を寄越したり、邪魔ばかり

しに来て、私は非常に侮辱された。世の中はさう單純なものぢやありませんまいッて、悉皆夫れ相當な秩序があるのですよ。私がどんな低い境遇の人にも、平等に交際つて上げてゐるから、可い氣になつて、自分位な者はないと自惚てゐらッしやる。一體全體何處を押すと、あんな失敬な音が出るんですか。……………」

「いえ、斷じてそんな、……………。僕はそんな……………」

「まア、お聞きなさい、貴方は一人の婦人を愛してゐたのでせう。ねえ、さうでせう。」

「ハア……………」

「それでゐて同時に他の婦人を愛するのですか。其れが貴方の道徳ですか、信仰ですか、一夫多妻のモルモン宗の信者ですか。……………。苟も一旦愛し

た婦人のある以上は、假令其の婦人が死んでも、さう他を探すもんぢやない。それなのに貴方は、昨日は彼れ今日は此れと、他人の家庭を荒らしに廻つてゐらッしやる。……私にはもう餘程面會すまいと思つたけれど、幾乎弱い處もあるから逢つたのですが、私の宅ではね、私がかう云ふ身分だし、千代野にも初子さんにも夫々定つた人があるのです。何ぼ筆や紙が手頃になるからッて、大概にして置きなされるが可い。他人の人格を無視して済むもんですか。」と飽まで毒舌を逞しくする。

「まア、待つて下さい。」と其の時宮井は叫んだ。

彼は斯う熱罵される理由を略推定したのである。情々己が失策を悔んで、こんな愛想盡しを云ふ人に、辯明をした處が駄目だとは思つたが、餘りに激しいから、到頭堪忍袋が破れた。言葉遣ひも平素とは違つてゐる。

「貴女は確に僕を誤解して被居る。何もそんなに立腹なさるにや及ばんぢやないですか。貴女が侮辱されたと仰有るなら、僕も大に侮辱されたと思ふ。……尤も昨夜の手紙に一言書加へたことは、非常に悪うございませした。其れが貴女のお氣に觸つたのでせう。粗忽の段は幾重にも謝罪ります。尙又色々御迷惑をかけまして、實に恐縮の至りです。」と幾乎過らぬ口調になつて、

「ども僕は、餘りに残酷なお言葉でなからうかと了解に苦しむ。其れは随分世の中の冷酷には馴れてますがね、一寸の蟲にも五分の魂と云ふことがあるでせう。併し僕はそんな悪感情は有ちますまい。けれども、僕がそれほど不信用なんですか。僕の豊子を愛してゐたのは、そりや勿論事實です。と云つて、決して肉體上の交際をしたのぢやありません。徹頭徹尾



精神的にやつて来たのです。而して非常な辛酸を嘗めて歸朝してからも、半時語合ふたぢやなし、……………」と思はずほろりとした。

花子は先の意氣込みを失つて了つて、眞蒼な顔で胸を抱へてゐる。其の隣に室にぼそつと物音がした。けれど宮井は何にも知らないで、言葉を續ける。

「僕はどうか靈的に發達したい、而して過去の失敗を償ひたい、安心立命がしたいと思つて、凡ての肉情を殺してます。貴女にお願ひした通りを守つて、其れがため随分友人にも其の他にも不義理を敢てした。其の家の門口まで往つて、迎ひに出てゐる人間を振切るやうな事さへ斷行した。其れから彼女が下宿へ生花の稽古に来るから、是れは到底遣切れをむないと観念して、十九日の晩柏木へ引越したのです。其れも恐らく僕には難事だつ

た。永らく世話になつた宿の婆さんの好意も無にせにやならんし、其の他の關係者の感情も害したのです。……………」いやはや僕は詰らぬ男です。駄目です。」と凄然長歎息をしたが、腦裡は忌々しさで一杯である。齒と齒がざり／＼鳴つて、非常な渴きを感じた。けれども先刻茶を一杯突出したきり、其れ以上何にもくれないから、是非がなかつた。

花子は低い聲を擡出して、

「私が悪うございました。」と幾度も云ふ。

「いや、駄目です。僕は馬鹿な男ですよ。」

宮井は彼女の言葉に些とも耳を藉さない。其の位の事を云はれた處が、蹶躪られた心は和ささうもないのである。

「そんなに駄目／＼つて、仰有らないで……………」と力一杯の流眇を浴せ

る。

「さうですか、駄目には違ひありません。併し人の行末は解らぬものでせうよ。僕が今後どんなに墮落するやら。」と自狂を云つて、やをら腰を浮かした。

花子は一寸訴へるやうな容貌をしたが、直ぐきツとなつて、引止めはしなかつた。で、宮井は聊か物足らぬ心地で立上つた。此れが最後だらうと咳きつゝ、段梯子をドシ／＼降りた。それでも立關先では、叮嚀に挨拶をして退いた。其の時彼は、誤解と知れきつてあるのに、此の儘歸すなんざ實に横着な遣口だと、骨髄に徹する寂寥と憤怒に襲はれた。

五六歩行つて、

「ふん、これだけの家に住んでると、人の人格を無視する權威があるのか

い、偉いもんだ。」と腕を扼しながら振向いた。

ピヤノの音が洩れて来る。其れをまた彼は驕奢の音楽を奏して、弱者の前途を嘲つてると、癢に觸へた。が、何だか形勢が不穩さうであつたので、慄然差込む恐怖心を抑へて、大跨にすたく／＼歩み出した。

## 七の二

空は怪しく曇つて、十日ばかりの月の宿つた薄い真綿のやうな雲が動いてある。其の一段下を正體のない黒雲に急々通られて、月は時折影射さぬまでにぼつと照る。星の光は數へる程も見えなかつた。生暖かい風が頓狂に吹くので、底力に満ちた自然界はさ／＼上側だけ鳴る。定めし塵埃が素敵に飛んでゐるであらう。宮井は物騒な夜の千駄ヶ谷の場末を、齒齧みし

たり腕を扼したり、地輪踏んだり電信柱に突當つたりして、嗟、唉、馬鹿にされた。苟も男子が個々たる女性にあんな譏諷を受けて、是れが黙つて居れるもんか。残念だ、言ひ足らなかつた。覺えてゐる、己れツと、憤慨に堪へかねつゝ二三町歩んだが、次第に其の勢ひは抜けて來た。自分は何で斯う薄命なんだらう？ 非常な犠牲を拂つては、無上の凌辱を受ける。一度ならず二度まで人にも話されぬ失敗をやつた。こんなに不如意續きでは、到底世の中に生きて居れんと、前途が暗くなる割合に過去が明るくなつて來て、悲しく淋しく口惜しく齒痒く思はざるを得ぬのである。ヴァイオリンの幽しい音のする家がある。三味線も何處かで鳴つてゐる。駄菓子屋などの店先では、荒吹く風も氣に懸かりそむない高調子で、ガラゲラ笑ひ合つてゐる男女がある。兩側の家には大抵人が住んでゐる。妻や子

供に圍まれて、夫々人生を樂んでゐるやう。吾輩はこれだけの邸宅を構へてゐるぞと云はぬばかりに、——敢てそんな積りではあるまいけれど——名乗を上げた街燈が方々に點いてある。宮井は此等の眼に觸るゝ物毎を彼に比較して、自分位不幸な者が何處にあらうかと、身も世もあらぬ心地で重い足を引摺つた。最早神の愛も、基督の救ひも信する餘地がないので、不圖鶏の宵啼を聞いてさへ、噫、怪事だ、生きながら葬送の鐘を打たれたやうなものだと、飛んでもない迷信を起して泣くのであつた。小さい川がある。彼は石橋を渡りかけて、急に少時忘れてゐた渴きを覺えたので、此の水を飲まうと、流れを眺めた。向ふ河岸には人家が立並んである。其の時月はぼんやり照つて、薄すり影を投げてゐたが、何分堤が高から、一寸に目的は遂げられそむない。辛々草に掴まつて、片手で掬は

うとすると、開いた口へ砂埃がばつと来る。加之危く落こちさうなので、宮井はもう厭になつて堤へ上つた。けれど水の欲しさは何うしても歇まぬから、其處らに感ついてゐると、突然後から、

「宮井、そんなに喉が乾いてゐるのか。」と聲をかける者があつた。

宮井は吃驚振向いて、其れが若槻であつた事だけは合點した。が、殆んど呆氣に取られて、

「あ。」と無意識に答へた。

「そんなら、幾らも方法がありさうなもんだ。安低斯山中ちやあるまいし。

……融通が利かぬ男はこれだから困るッて、此の河は下水だよ。」

「さうかね。」

「兎に角まア此れを飲むさ。」彼はラム子の詰を抜いて、宮井の前に差出し

た。

「えッ。」

「何かの事を後で緩くり話すから、安んじてやりたまへ。君の狂態を見兼ねて、買つて來たんだよ。」

「難有う、……。だが追跡されたなんざ目面ない。」ときままり悪るげに

グイ〜飲みほして、美味かつたと頻りに禮を云つた。

其處で若槻は鳥渡ラムの空壘を返して來て、

「さア、行かう。僕はね、君に満腔の同情を捧げて、斯う奔走してゐるの

だから、餘り苛々したまふなよ。そら誰にでも随分あることだ。些とも赤

面するにや當たらぬ。」と云ひつゝ歩き出した。

宮井は稍落附いて従ふたが、さて彼の續々射かける質問の矢には殆んど僻

易した。自體教會の近所で僅に誦合ふ位の交際なので、若槻の方は毎も宮井くと呼捨てにして、年少者の僻に後進かの如く遇してゐるけれど、彼は表面以外に十分打解けられなかつた。それなのに、山邊の内意を受けて宥めに來たのか、或は彼が窺聞しての行懸りで、友情を盡してくれるのか、其の邊は耽と分からぬが、何しろ秘密中の秘密を事もなげに取扱はれるのだから堪らない。

「……………でもさうだらう、若し山邊が君を非常に戀して居らぬなら、何にもあんな毒舌を吐く譯は決してない。現に君の往時の戀人を遠ざけやうと爲たんぢやないか。」

「いや。」と之れには透さず言葉を入れて、

「元々彼の方が僕に精神的交際をしろつて、勧めたのだ。」

「そりや彼女の計略さ。君も其れを自覺して、多少喜んでたに定つてゐるでなけりや、戀しい女をうつちやらかして、要らざる義理立をする馬鹿はあるまいよ。僕等が一寸考へるとね、君は山邊の意志を忠實に迎へたのだらうが、何しろ其の遣方が頗る不味かつたから、あんな激烈な衝突をしたのだね。一體人間はよく些細な感情の衝突から絶交よ何よと、騒ぐ動物だつて、餘り褒めた藝當ぢやない。殊に君のなんざ散々濡衣着せられたのだから、つい兇器に訴へたくもなるもんさ。それかと云つて踏んだり蹴つたりぢや、何だか色消しだなア、……………」

「そりやさうとも、僕は敢て彼の人を遺恨にや思はぬ。只胸くそが悪いだけだ。」

「無理もないこつたア。」若槻は立止つて、巻裏に火を附けた。

二人は何時か青梅街道を越えてみた。ステーションの方の空は、遠くの火事のやうに明るい。流笛や列車の音が轟々鳴つてあるが、四下はひっそり寝静つてゐる、風も幾乎収まつて、月の姿の見えぬ今にも降出しさうな雨氣である。苦楸は快活な口調で語り続ける。

「無論今晚の彼の暴言は、山邊が悪いに定つてゐる。けどもね、其處は女の天性と云はうか、人格を輕んじられて來た遺傳？ ……まあそんなもんだらうよ。 ……どんな女でもある弱點だから、讓歩してやらにや可かん。彼等はいざと男にや込まれたら最後、棄られやすまいかと鋭い恐怖心に打たれる。假令死ぬほど惚れた男の手でも、其の出様が不味かつたら、容易に握手はせんね。殊に山邊のやうな女は尙更だ。」

「併しね、彼女は一面大に同情すべき女だよ。僕も腕とは知らぬが、何で

も子供の時母親を失つて、繼母に引懸かつたもんだから、つい家庭の温藉に觸れないで生ひ立つたのだね。だから厭に反抗心の強い女に出來ちやつて、其れがクリスチャンになるやら、亞米利加の空氣を吸つて來るやら、教會の諂諛屋に擔がれるやらで、丸でもう君、女の特性は發揮されてないのさ。始終愛の福音を口にしながら、其の實愛の妙趣を味つちや居らん。一寸まア酷評したら、虛榮心の化身だね。けれども僕は、さう擯斥すべきでないと思つて。若し彼女に精神上の空虚を満してやつたら、屹度有爲な婦人になるよ、中々腕はあるのだから。誰が好んで虛榮心を持てるもんか、大抵は男性と没交渉の結果らしいね。或は其の關係に敗を取つた變形物だ。僕等の理想の、 ……いや、理想つて、多少氣に入つた女は、 …… 澤市の女房のやうな行方だつて、それかと云つて、フオセット

夫人も棄てられないせ。……。」と未だ此の談話の了らぬ内に、宮井の新しい宿へ着いた。で、若槻は彼の肩先を叩いて、

「兎に角今晚はこれで失敬しやう、君が此處へ引越したのは實に面白い。」

「あゝ何うも有難かつた。」

「僕の家はね、十軒程先の横丁を左へ廻つて、突當つたら、右へ行つた處だから、時々遊びに来たまへ。僕も来る。……。」まア、何しろ君、苛々しちや可かんせ、信者がよく口僻にするだらう、神は其の愛する者を鞭打たざらんやつて、あれだよ、君の考ふべき點は。」と云ひ捨て、若槻は元氣に溢れて別れて了つた。

後で宮井は少時佇んでゐたが、苦しさうな溜息を吐いて、もう寝てゐた宿の人を起きて貰つた。遅くなつて済みませんと、身を窄めつゝ淋しい居間へ通つたのである。

### 七の三

宮井は其の夜殆んど眠れぬ程神経を惱ましたが、花子の無禮を憤る情はさう強くなかつた。丁度灰を被せた煥のやうに、心の奥底でぶつゝ燃る位であつた。何分彼は、斯う不仕合では詮方がないと云ふ人生の悲哀に満されるので、實際の彼は存在しない。若し若槻があゝ慰めに來てくれなかつたら、今頃どうしてゐるだらうかと想像して見て、彼は慄然冷汗を流した。一體突飛なことをやつたものだ、あんなに愛してゐた女を棄て、了つて、何で山邊の意ばかり向へやうとしたのか知ら。我ながら不思議である。豊子は最早駄目だ。此の人の氣に入つて置いたら、失敗の生涯に辭去

を告げて、幸福な新天地へ進まれまいかと、つい依頼心を起したのが抑も  
の不覺であつた。

勿論豊子に逢ひたかつたには違ひない。今でも彼女の膝へどつかり此の身  
を投込みたい情の聲はある。けれど將來に連續る希望がないから、何かの  
暗示を受るとか、追想に耽つた場合の發作だ。既に業に伊豆で絶縁の覺悟  
を定めたのだもの。只々背かれた無念さ、献げた犠牲の徒勞さに悶へたの  
に止まる。其の荒涼極る腦裡へ花子が浮んで來た。最初は別に感じなか  
つたが、教會で出會ふなどの折々に、さつと顔を染めたり、秋波を送つた  
り、味な文句を使つたり、指環を煌めかしたりして、色んな思はせぶりを  
仕向けたので、自分は識らずくの内に彼女の方へ趣いてゐた。殊に多  
羅尾が偽善者だと貶稱しつけた時、自分は却つて反對の考へを持つやうに

なつた。是れは自分を愛するの餘りこんな不徳を敢てしたのだらうと、花  
子に同情を寄せて、——或は自惚れて、——多羅尾等の引張る逆比例に遠  
ざかつた、其の好意を無にしたのは悪かつた。らうが、人間は同時に二人  
へ眞實を盡す事は出来ないから、仕方がない。

然うであつたのに、花子は非道い。何ぼ自分に直情經行の傾きがあつて  
も、あんなに切出したくはなかつたのだ。が、看々不在を使ふやうな冷  
遇をするから、寧ろ打開けたらばと思つて、唯一言仄かした。けぢやない  
か。斷じて自分は彼女を侮辱した覺はない、心にもない虚偽は微塵も語つ  
ちや居らん。若し地位の低い男はどんなに罵詈雑言しても、氣に入らなければ  
打ちやらかしても、人格を蹂躪しても可いのなら、此方にも所存がある。  
自分の現狀は始めから斯つてあるのだ、自分が豊子を愛してゐたことも知



つてる筈ぢや。其れ處か元々彼女の方から精神的交際をしるなんぞと  
 幾乎忘れてゐた舊情を挑發して、散々自分を苦しめた。而してあゝ云ふ誓  
 約を強ひて置きながら、些とも其の義務を果さない。自分は信じて誓ふた  
 のが原因になつて、非常な窮境に陥つたのみならず、多羅尾を怒らせ、  
 豊子を痛めた。——或は彼女を殺したに當るかも知れん。——親切なお玉の  
 氣まで損ねて、こんな處へ馬鹿々々しく引越したとは、何たる失策の上塗  
 りだらう？ 噫、實に山遊花子は傲慢無禮だ。不人情な我儘勝手だ。一生  
 涯を破壊された。……………

斯う宮井は一頻悲憤するが、直ぐそんな憎悪は忘れて了つて、若槻に聞け  
 ば、案外同情に耐へない人だと未練がましく思ふ。幾ら劫を煮しても仕  
 方はないから、我慢して和解しやうと云ふ氣になる。すると夕立が通越し  
 て、向ふに青雲が見えるやうな感じがしてあつた。

翌朝彼は十一時過ぎに起きた。此處の家は八百屋なので、飯だけは焚いて  
 くれても、副食物は彼が拵へねばならぬのである。で、つい面倒臭かつた  
 から、近所の蕎麥屋へ空腹を満しに行つて、其の足で彼は牧師を訪問した。  
 丁度和田は不在であつたが、愛想の可い奥様が手を取らんばかりに座敷へ  
 請じた。

「何だか厭なお天氣でございますね。」と云ひつゝ茶を侷める。三十二三  
 の年配の、色のくつきり白い小柄な婦人である。

「は、どうも可けませんです。」宮井は肩を張つてゐる。

「さア、すつとお進みなさいまし。もう歸ります時分ですから。」

「難有うございます。ですが貴女、何うぞお構ひなく……………」

「さうですか、では一寸失禮申します。」と引下つた。食事中であつたのであらう。

宮井は漠然四邊を眺めた。床の間には聖書や讚美歌の類が置物のやうに飾られて、其の脇の違棚に、基督の審判の光景を綿密に描いた油繪が立掛けである。多くの猶太人は幾世紀間か待望んだ救主を殺さずば止まん體で、パラバを釋せと叫んでゐる。何故こんなことをしたのであらうかと、此處へ目を注いだ彼は異常な感に打れた。世には往々俗衆に誤解され忌憚されて、ソクラテスのやうな最後を遂げた大人物もないではない。けれど極悪非道の盜賊の命をひをしてまで、基督を十字架に釘けねばならんとは、實に淺ましい人間の根性だ。日頃餘り考察しなかつたが、是れは十字架の贖ひの教理よりも不思議な事實である。而してイエスキリストは十字架上で何と

云はれた？ 父(神)よ彼等を赦したまへ、彼等は其の爲す處を知らざればなりと祈られた。嗚呼、活字に傳つてある丈けで十分足つてある。其のことを思つたら、自分の不平は何だ、苦痛は何だ、誤解されても可いちやないか、氣の小さいと、靈妙な信念を喚起されて、彼は神に黙禱を捧げた。さうかうする内に後の襖が開いたので、宮井は振向いたが、六才位の男の子が入つて来て、

「いらッしやい。」と手を着いた。

## 七の四

和田牧師の愛子である。顔色は少し蒼白い方だが、二重臉のぱツちり涼しい眼眸をした可愛げな坊ちやんだ。首筋に手巾を巻いて貰つて、ネルの上

へ羽織を暖さうに着てゐる。宮井は間に合せに學校へ行きますかと聞いて見た。

「え、僕ア幼稚園へ行きます。」と邪氣ない膨みのある聲で、はつきり答へた。

「今日はお休みですか。」

「いやさうぢやないです。でも今日は天氣が悪いのでせう。僕の先生は天氣の悪い日に風をひきました。ですから僕ア行かんです。貴方も風をひいちや可けませんよ。」と手を振りながら座敷中を歩く。

「さうですね、風をひいちや可けません。」

「ですから僕ア神さんに祈ります。どうぞ神さんよ、善い天氣にして下さいッて。風をひくとね、死にます。よッちやんは死んで、天國へ行きますし

た(と空を指さして)僕も死んだら、天國へ行くのです。それは花の咲いた奇麗な處ですよ。ですから貴方も行きますよ。」と云ひつゝ彼方へ往つて了つた。

宮井は驚かざるを得なかつた。何うしても六つや七つの子供の言葉とは思へない。家庭の感化はこんな強いものであらう？ 而して又宗教がどんな幼子の腦裡にでも宿つて、其頑固な思想をもあつて支配するの知らぬ。眞面目に考へて見ると、何も彼も不思議なことはかりだと、彼は全身が縮かむやうに覺えた。

程なく和田は、ようこそいらしたと出て來た。彼は丁寧に挨拶をしたのである。

「長くお待ち下つたでせうな。實は私も一度お出會ひしたいと思つてた處

で、大變好都合でした。」

其の時宮井は牧師の様子をチラと窺ふた。太い眉根に皺を寄せて、餘程不機嫌の體である。外は相變らず吹荒れて、時々縁側がざつと雨で濡れる。何處かでカタンと竿の外れたやうな物音がした。奥様が出て来て、雨戸を半分繰つた。洋服のまゝ窮屈げに坐つてゐる牧師は、薄暗くなつた座敷に調和して、いよく彼には六ヶ敷さうに思はれた。努めて平靜を保つてゐると、

「早速ですがね。」と相手を胸しつゝ和田は切出した。

「はア。」

「近頃情けない貴方の噂を聞いてますが、奈何したんです？——其れは青年時代には陥り易い誘惑だけれどもね、他人の蹟きになるやうな罪を犯

しちや困りますよ。貴方の救ひにも係ることだし、……………」

「いえ、そんな覺はありません。」宮井は聲を顫はして、躍起になつた。

「さうかね、私もまさかと思つてたが、或る婦人に結婚を申込んだと云ふから、吃驚した。氣を附けて下さいよ。」

「はア、併しそりや山邊さんにお聞きなすつたのでせう。」

「左様、或る婦人を執持てと頼まれたけれど、其の人には良人があるのだから、打遣つて置いたら、それちや貴女をと申込まれたツて、非常に迷惑してられた。女ばかりの家庭だからね、そんな突飛なことをされちや、誰だつて驚きますよ。——私は貴方の將來に多大の望みを囑してゐたが、全く落膽せざるを得ない。以前にも其れに似た問題で、良家の令嬢を傷めなすつたと云ふちやありませんか。有爲な才能を持つてゐながら、只一片の

客氣に驅られて、自他を苦しめなされる。實に残念な話した。いや、實に恐る可き罪だ。

「そら英雄偉人の生涯には、随分突飛な逸話もあらうがね、我々クリスチヤンは初中終己れに打勝つて、神の御意に従ふて行かねばならぬのです。それに彼の女は何うだとか、此の女は一寸佳いとか、無暗に騒いだ日にや未信者以上だ。けれども人誰か過失なからんやで、私はさう貴方を責めませんから、今後屹度注意なさいよ。」と宮井が感々してゐるので、殆んど罪人に決定したかのやうな警告を與へた。

彼は辯明したくて堪らぬが、山邊の處置が餘り酷いから、もう頭腦が激して了つて、些とも物が云へない。而して幾乎反省せねばならぬ點はあるし、兎も角自分の現状が卑いだけに、公々然と對抗し難い。で、彼は涙を零し

て、

「私が……悪うございました。」と手を着いて、只管謝罪つた。

牧師は重荷を卸したやうに寛いで、勦りげに話掛ける。何時迄も獨身であるのは危いから、良縁があらばと思つてゐたが、伉儷の問題はさう輕々しいものぢやない。第一兩者の意志が疏通せにやならぬし、境遇の程度も考へる必要がある。申込を受けたが爲めに非常に迷惑するやうでは、實が結ばぬのみならず、往々忌はしい状態が現はれる。併し貴方は從順に謝してくれたので、喜んで山邊にさう通じやう。而して双方に悪感情の残らぬやうに盡力するから、眞面目な信仰に於て、兄弟姉妹の交際をするのは所望だが、餘り手紙をやつたり、訪問しては可けないと、牧師の言葉としては一應道理な言分であつた。

けれど宮井には意外な恐怖で、一向頭腦へさう響かない。只もう薄氷を踏むやうな心地がして、腋の下に冷汗をかいた。可加減な返辭をして置いて、間もなく彼は座を立つたのである。門口へ出たら、雨が繁吹いてあつたので、傘をと云はれるのに耳をもかさず、びしょ濡れになつて宿に歸つた。

## 七の五

自己の事は棚に上げて、他人の非ばかり評くのは不徳義である。然も其れに輪をかけて、悪しきさまに言觸すに到つては、斷じてクリスチャンの行爲でない。宮井は其の點で花子が面憎くツて堪らなかつた。大に牧師の輕卒な態度を詰つて、黒白を争ひたいと後から腹立つた。若し彼我の地位を換へたら、山邊はどんなに怒るだらう？ 自分の彼女に會ふたのが罪なら

いざ知らず、全體は彼女に胚胎した僻事だ。其の贄になつて、自分は斯う損害を受けてゐるに、何を以て豊子と醜關係があるかの如く牧師に告げられたか。確な證據を見せる。敢て自分はこんなに中傷され、誹謗され、有りもせぬ名譽を根本的に汚される覺はないと、憤る可き理由は涯限なくあつても、餘り彼は激しなかつた。十字架に釘られたイエスを思ふからである。以前宮井は基督が高過ぎて、其の懸隔の甚だしさに失望したが、最早牧師も信者も一向恃むに足らぬから、其處へでも思想を凝して、安心の境地を得ねばならぬ。で、彼は膝に霞むイエスを眼前の實在者の如く見做さうと努めた。すると妙に鬱結した腦裡が軽くなつて、人生が無意義でないやうに感せられる。愛のために誤解して、辱かしめる對手は、憐みこそすれ決して憎むに當らんと思つた。それで彼は益々聖書を研究して、神の聖旨を

深く知らう。哀しむ者は幸ひ也との福音に眞實浴したら、或は過去の失敗が喜びの材料になるかも知れん。あゝ然うだ、でなけりや、何うしても天道は非だ、神の愛なんぞと云ふ宗教は人を欺偽る淫祀だと、雄々しい勇氣を起したのである。

彼は襟を正して、祈禱を捧げ、虚心坦懐に聖書を読んで、胸に應へる美妙な文字を見出した。が、其の間始終邪魔になる一個の影がある。花子の姿が其處等に隠現いて、此の儘では濟むまいと思はされる。苟も同じ神を信する以上は、互の意志が疎通しないでは虚だ。「……………まづ往て爾の兄弟と和ぎ後きたりて爾の禮物を獻よ」とか、「もし我は神を愛すと言て其兄弟を憎む者は是偽者なり既に見るところの兄弟を愛せずして未だ見ざる神を何で愛せん乎。神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし此誠は

我儕彼(神)より授けられたり」とか、其の他此れに類似の教訓が澤山ある。だから、こんな甚だしい矛盾を抱いて居れるもんか。若し山邊が未信者であるなら、格別差支はない。寛大な度量を以て許してやる。けれども彼女は自分の属した教會の有力者ではないか。果して彼女が自分をさう憎むとすれば、模範的クリチャンと任せられた山邊は、未信者に數等劣る婦人だ。が、まさかそんな偽善者ではあるまい、女の淺蕩な心から感情に驅られて如彼したのであらう。さう見る方が穩當だ。すると、自分は和解をする必要がある。抑も彼女があゝ惑ふたのには、多少自分の責任はあるし、自分も些とも憎んで居らぬのみか、生命懸けの戀人さへ振棄て、意を迎へた女だものと、宮井はこんなに考へた。

さてどんな手段で和解がされやう? 通常は先づ山邊の方から詫びて来る

のが順序だから、一寸妙案が浮かばない。訪問した處が昔なく門前拂ひを喰はすだらう。それぢや牧師に頼まうか、彼の様子では到底十分に明されぬ。若槻なら先刻にも立寄つて、何かと彼女を辯護するやうな談話をしてゐたが、彼は千代野と親密なが爲めに、あゝ肩を持つてゐるのだらうから、こんな大事を委ねても可いかは疑問だ。さうすると、最早手紙には懲々してゐるが、矢張他に仕方がないと、彼は手紙を書くべく餘儀なくされたのである。

で、宮井は極く正直な和解の哀願狀を丁寧に認めた。そしてこんなに謙遜に頼むのだから、まさか却下するやうな事はあるまいと思つた。が、勝利の確信のない彼は、二三日も其の手紙を得出さなんだ迄に躊躇してゐた。元來自分は物に凝固る性ではあつたが、こんなに神経質ぢやなかつた。け

れども辛辣な運命に弄ばれて、次第に斯うなつたのだ。屢々突飛な闇雲流を行つて、再三大失敗に終つてゐる。此度も亦徒勞に歸さうものなら、それこそ證方がない。斯う眞心を殺されてばかりゐては、生存の價値はなくなる、憐れ宮井は憊んだ。其の不安が嵩じて、次の日曜には教會へ往きおびれた。

苛々氣を腐してゐると、色んな想像が込上げて来る。山邊が彼の手紙を見て邪推して、忘れられぬ廿一日の晩のやうな佛頂面をしてゐやすまいか。此處へ引越した動機の一つは、新生涯の方針が確定する迄出来るだけ節儉をして、僅なりと會堂建築に献金しやう。教會や牧師に接近して、靈性の發達を計らねばならぬと心懸けたのだが、嗚呼實に薄情極る勝手氣儘なものだ。始終神よ基督よ聖書よ愛よ犠牲献身よと口にしてゐながら些とも



實際の親切はない。自分のやうな貧しい傷付いた人間を蹂躪することは、彼等が姦悪なる世の中と見下してゐる未信者よりも數倍酷い。豊子はあれでも自分の愛に報いてゐる。多羅尾にしても幾乎職務上とは云へ、自分の窮境を救ふてくれて、更に恩がましく振舞はぬのみか、徹頭徹尾自分の同情者だ。彼ほど自分を信じてゐる男はない。其れを自分は利己主義だと毛嫌ひして無下に排斥したが、利己主義だつて可いぢやないか。彼は自分を利用する代りに、自分も彼に依つて利せられる。若し理想よ何よと意地張らないで、豊子と結婚して置いたら、双方が利を受ける。何の道人間は全然利己心より自由になれぬのだから、慈悲宗教の愛を擔廻して矛盾だらけの偽善を行ふてゐるより餘程優しだ。利己主義同士で夫婦にもなれる。事業も出来る。社會の萬般は皆それで成立してゐるのだ。そ

れたのに、自分は舊生涯の羈絆を脱せねばならんと思つて、與へられた幸福まで糞土の如く棄てた。其の報酬に何を得た？ 只侮辱され、嘲笑され、呪詛されて、斯うも苦しめられたのみだ。であるから矢張宗教は生活に餘裕ある人の道樂か、或は叶はぬ時に便宜上叫ぶのだ。兎に角信仰云々に感ふて、山邊に向ふたのは、終生の失策だつた。随分大膽な批評を加へてゐながら、あゝ趣いたとは悪魔に魅せられたからだ、教會では説教の始つてある時分、宮井はこんなに考へてゐた。さればとて、彼は此の際豊子の方へ走る勇氣は無い。そして心を籠めた彼の手紙はつい昨日出したのだから、未だ花子に絶望するに及ばぬ。和睦の成立すべき餘地は幾らもある。けれど彼は折角萌した信仰を殆んど失つて、萎然介れて惱んだ。永らくの習慣になつてゐる故郷の追想が又もや起る。

若し幼友達や舊知の者が自分の現状を見たら、まアどんなに思ふだらう？  
 其れが愧しさに今日まで父母の墓すら詣でられんと、毎もの様に悄悄と涙含  
 むのである。而して親兄弟の生命及び一家の財産を奪ふた悪漢竹川を片時  
 も早く殺さしやならんと満身の血を沸すのだ。が、其れは問もなく静まつ  
 て、自分ほど女に崇られた者はないと悲しむ。忘れもせぬ姉の婚禮には、  
 試験前に厭な謠を習はされて、四海波を歌ひに行つた。其のお蔭で十數代  
 續いた我が家は深淵の底に沈淪して了つた。其れから自分は豊子を戀して、  
 南米の炎熱に曝され、殘忍な牢獄の汚辱をも受けた。思ひ出しても慄然す  
 る。せめては其の効を奏したのなら可いが、全然徒勞の外得た處はない。  
 それに今度も斯くの通りだ。餘り性懲もなく女を愛してゐるから、こんな  
 に天罰を受けるのぢやないか知ら。と云つて、微塵も不義を働いた譯でな

し、男女の交渉は萬物普通の法則でないか。人或は妻子のある身で妾を著  
 へたり、獸慾を逞しくして無垢の處女を弄んだり、白髪頭で娼婦に戯れ  
 たり、不貞操にも姦通をしたり、言語同斷の罪惡を犯してゐる。世界の支  
 配者の大多数は殆んど其れだ。けれども彼等は自分のやうな悲痛は抱いて  
 居るまい。自分はこれほど女に苦心をしても、蚊帳の柱の團圓もおろか、  
 青樓一夕の快すら味ふちや居らぬ。實に人生は不公平だ、不可解だと彼は、  
 暗然として其の成す處を知らなかつた。  
 さう云ふ矢先階下の内儀が上つて来て、  
 「お客様、郵便ですよ。」と一通の信書を届けた。  
 宮井は氣もそゝろ開封したが、中から彼の送つた儘の手紙がころりと現れ  
 た。彼が心血を注いだ報酬は、花子に狀袋を一枚と三錢切手を費さした

に過ぎない。其の表書は然も男のらしい筆蹟である。さも苦しうに溜息ばかり吐いてゐた彼は、旋て何處かへ出て行つて、正宗の塚詣を袂へ入れて歸つた。

「飽まで冷酷に取扱ふんか。」と張合ひなく叫んで、毒でも呷るやうに酒を飲んだのであつた。

## 八の一

此の頃は梅雨の期節である。毎日薄墨や灰色をした雲が覆被つて、煙のやうな驟雨が降る。太陽は滅多に姿を見せない。其れは沈鬱極まる陰氣な天氣だ。其の間宮井は不平を酒に遣つて、微の生へた生活を餘儀なくしてゐる。丁度鐵網の罫に罹つた鼠の形で、一類は網を噛んだり、細い目から脱

けやうと悶くが、直きに疲れきつて、萎へて了ふ。若槻が彼の面前で評したやうに、彼は全く囚はれた人になつた。幾ら人格を蹂躪されても、抵抗する氣力がない。時には自分の爲めに神の審判を受けて貰つては困るとすら思ふ。で、彼の今此の重圍を逃れる方法は唯一つだ。十字架上の基督に頼つて、正義の行はれる理想の天國へ往きたい願ひである。若し基督が客觀的永遠の實在ならば、自分は先づ愛されさうなものだと云ふ信仰だ。以前彼は秘露の獄中で、臆げながら然う信じてゐた。けれども今日では其處に疑ひなきを得ん。

近い話しが、聖書を人生の羅針盤として、基督に遵奉してゐるクリスチヤンの行爲はとんなものか。相愛せよとの教訓を體現した者は一向見當らない。自分も信者の片端だが、何日教會へ出席しなくても、若槻が二三度擔

ぎに來た外に、所謂愛する兄弟姉妹は誰一人訪れん。若槻は多分小説の材料にしたいのであらう、既に餘程揺ぶられてゐる。而して現代の基督教が如何に腐敗してあるか、宗教家が墮落して居るか、クリスチャンが虚偽に傾いてゐるかを聞かされた。教會はもう駄目だから、早く逃げないと、君のやうな男は殺されるぞと勸告した。其れから又、彼は自分に係る斯う云ふ風評を知らしてくれた、自分が牧師に止められてゐたにも拘はらず、山邊に手紙をやつたのを據所にして、宮井は偽善者だ、色情狂などと罵つて、清潔な信者が寄附かぬやうに警戒してゐると。勿論若槻も其の色情狂の仲間ださうである。

是れは多少参考になつたが、果して然らば、最早眞面目に考へる丈け野暮だ。最初山邊は自分をほんとに弟だと思つて、盡力すると誓つたが、どん

な盡力をした？ 自分は心の全部を捧げてゐるに、散々侮辱を加へて、未だ飽足らぬやうである。何處の國にか愛する弟を苦しめる姉があらう？ 禽獸でも愛する者は愛してゐる。で、自分は凡てを愛の爲めに免して、聖書に法つた和ぎを求めた。すると其れが牧師に鳥渡忠告された事をしたと云ふ抵觸に依つて、自分は偽善者になる。山邊を毀ひたい意志は毫頭自分になかつたのみか、眞實彼女を愛するの餘り人道を重んじたのだ。が、其れを逆に戻す彼女は無罪で、自分には、我儕に罪を犯す者を凡て免せば我儕の罪をも免したまへと、祈る信者の免してくれない程の大罪がある。何と面白い道徳ではないか。聖書を幾ら熟讀しても先づ見當らぬ思想から出た現象だ。是れが未信者なら兎に角、自分よりすつと修養の深い立派なクリスチャンの行爲だから、或は聖書が天啓の福音でないのかと思ふ。曾に

教會員の翫賞に適した書籍なら、自分のやうな餘裕のない者は讀んで居れぬ。若し客觀的眞理で無い對照を信じてゐたら、自分は早晚失望せにやならん。——斯う宮井は基督教に疑義を挿むのである。

で、彼は此の疑問を質さうと思ふが、數年來の疲勞が眞底から出て來て、身體が倦くて仕様がなない。而して一面宗教的情緒に解放されたいと願つてゐる。厭々ながら酒も煙草も喫んで、墮落しなくちや駄目だと努力する。肉慾も其の氣分になれた場合には、十二分耽溺する積りだ。若し人間が良心とか倫理とか拘束された奴隷の状態から超絶し得たら、どんなに愉快だらうかと彼は想像する。そしたら一番世の中を驚かすやうな空騒ぎをやつて、けろりと死んで了ふ。けれど生死の巷に幾度か彷徨ふた彼は、自分の意識が死の斷末魔に於ても敢て消滅しそむなく實驗してゐる。何時迄醒めてゐ

て、何時眠つたか、其の一刹那は解らぬが、翌朝目醒めて又も自己の存在を認識するやうに、人間の生涯は一晝夜の擲りではあるまいか。酒にでも酔つてゐなければ、到底彼は生死の境から自由になれ無い。其れが出来ないから、悪を行ふは王者の道徳なりと、不安の念なく叫んで居れぬ。氣狂ひならいざ知らず、ニイチエも臨終にはどう思つたか疑問だ。何れは困らうけれど、まア當分は可いと巫山戯て居れる人は、滑稽趣味に富んでゐるのだと宮井は思ふ。其れには餘り彼は眞面目に過ぎてゐる。彼の靈魂は鈍らしても直ぐ醒める。忘我界に遊離して居れるやうな美しい境遇でない。畏に罹つた窮鼠である。で、彼は一月間程人生觀の解決に苦悶を重ねたが結局先づ聖書を參考にして、牧師に頼らず教會員に依らず、獨力以て神の大生命に觸れねばならん。果して基督が普通の實在ならば、顯然其の靈格

を得得せずば措かんと云ふ志を次第に強めて来た。  
 或る朝のこと、稍激しい地震があつた。宮井は臆病にも屋外へ飛出した。  
 店先の臺からころ／＼落ちる胡瓜や茄子を拾つてやつた。久振りに新鮮な  
 空気を吸つて、案外愉快を覺えた。永らく抑はつてあつた活動力が何處か  
 らか頭を擡げるので、彼は此の機會に我れを勵まして圖書館へ行つて、色  
 んな書物を漁つて見やうと思付いた。熱苦しい羅紗の破れ帽子を冠つて、  
 て／＼大久保の停車場へ出たのである。  
 プラットホームには四五人待合はしてゐた。麗かな朝日がクワと照付けて、  
 宮井に取つては中々刺激が強過ぎる。或る男が線路の向ふの煙草屋から竿  
 の先に「敷島」を入れて貫つて、妙な仕方を買つてゐた。バクバク吹かす煙  
 が鼻の先へ來ると、彼は飲みたいなアと思はされた。けれども止めにした。

中野行の電車が着いたので、數名の人は降りた。其の内に丈の高い關長老  
 がゐて、宮井に叮嚀な叩頭をした。彼は其れに應じて、  
 「何處へいらッしやいますか。」と問ふて見た。  
 「和田先生の坊ちやんがお悪くツてね。」  
 「はア、そんなにお悪いですか。」  
 「もう危篤なんです。」  
 「そりや大變、彼の六歳位なお子さんでせう。」  
 「さうですよ、何でも急性な熱病に罹られましたね。」  
 「ぢや私もお見舞ひしませう。」宮井はつい其の氣になつた。

角筈の牧師の宅へ行つて見ると、坊ちゃんはまだ死んでゐた。

「お蔭で麗しく眠りましてね、悲しみの裡にも感謝しています。まあ、こんなですよ。」と牧師は座敷の真中に臥せらしてある愛子の遺骸の覆ひを取つた。

關は涙を浮かべつゝ近寄つた。宮井も後から密と覗いた。傍に看護婦が二人、人白い布團のやうなものに綿を入れてゐた。實に綺麗な死顔である。急病のことゝて、肉は些とも落ちてない。只すやく熟睡してゐるやうで、大きな伏見人形そっくりだ。まあ親の身にしたら、どんなに可愛からうぞ、日外立派な説教をしてくれたので、餘程異彩を放つた子供だと不思議がつてゐたが、今は早や此の世の人でない。何うも死んで了つたとは思へぬと宮井は凝然俯向いて、様々の感慨に打れた。

「では明日の何時になさいますか。」

「午後の一時か二時」と思ひます。今朝の七時十五分に眠つたのですから。」

「丁度其れが可うござんすね、随分お疲れなすつたでせう。」

「氣の立つてる所爲かそんなでもありませんよ。家内の決心も最早着いたらしいです。」

「日頃の御仰信が確實ですから、私も其の點は安心して居ります。」

關と牧師は話合ふてゐる。宮井は涙含んで、

「先生、何とも申様がありません、……………」と額づいた。

男子や婦人の弔慰客が續々ある。中には病氣見舞の積りで来て、氣を落す人もあつた。勝手元の方は大分ごたく取込んで居られる。それで彼は間

もなく和田の宅を辭した。  
 是れだから死生の程は計られんと、宮井は死の問題に就いて考へつゝ圖書館に着いた。而して牧師等は自分をさう擯斥してゐないと思つた。先づ何を讀まうと云ふ當はないので、彼は根能く目錄を捻くつて見た。試みに、ジョンワットソンの「宗教の哲學的基礎」と、ルナンの「基督傳」の二冊を借りた。廣い三階の閲覧室には夫々文字に眼を曝す數百名の人々がある。彼は以前此處へ經濟學書や商法の新刊を讀みに來たのであつたがと、端なく今昔の感に打れて、只もう隔世の思ひに満たされた。  
 遠くの谷中の方は青々と窓先に展けて、氣持の可い爽かな風が入る。其の具合にや、音樂學校での樂器の響きは近附いてある。宮井は色んな強い刺激を受けながら熱心に讀書した。けれど兎角解らぬ節が多いので、自分は

何も知らんてゐたと思つた。知識慾は盛に起るが、氣ばかり焦燥つて、感じ易い頭腦は直き疲れて了ふ。で、彼は二時頃にはもう續かなかつた。ぶらりと圖書館を出た宮井は、兩大師の前を車坂へ降りて、只ある蕎麥屋の暖簾を潜つた。午飯の代りに蕎麥屋へ行つて、饅頭二杯で胃の腑を満すのが彼の近頃の例である。而して彼は、こんなに黙語しつゝ正宗を一本やる。些とも酒なんか飲みたくない。それよりかにつと笑つて給仕をしてくれるやうな者があつたら、鹽舐めていも美味く喰ふ。其れが爲めには半生涯を棒に振つたのだが、もう永遠に消えて了ふのか。己れだつて、人並足らぬ片輪に生れつきやすまいし、普通以上の學力も有つてゐらア、随分人の出來ぬやうなことでも行つてのけるぞ。東西洋を跨に掛けて來たんだもの。何のこつたい、馬鹿々々しい。何處の馬の骨とも解らぬ人間と一緒に



澱粉ばかり喰つて、乞食のやうに腹を脹してゐると、時には涕沱涙が滴れるのであつた。

けれど今日は最初餓饒だけ命じて、彼は無意味に喰ひかけた。が、傍に田舎の小學教員體の二人がチビリ／＼さも美味さうに酌交してゐたので、つい其れに誘惑されて、一本取寄せた。毎ものやうな味は些ともない。厭々二三杯傾けて、彼は萎然考へた。酒位で臆つくやうでは、愛想の盡きた弱者だ、他の人は斯う愉快にやつてゐるに、何の差支があるもんか。畢竟自分が悪いと思つて、要らざる係蹄を拵へて、其處へ足を突込むのだ。囚はれて了つた不自然な人間だと、利氣んで又飲んだが、矢張味無い。何處からか底力のある悔恨の念が溢れて来る。こんな善けない生活を續けてゐて、他人の行爲を非難してゐる邊りか、他人は自分より皆な偉い。立派だ、清

潔だ。何でこんなに克己心が乏しくなつたのだらう？ 自分は非常な罪人になつてゐる。是れは花子に躓かされた所爲だと、責を免れる譯には行かん。善惡の境から脱したいと焦つても、何處までも逐はれるから、今更仕方はないと、彼は遺瀨ない冥想に耽つて、眞蒼な顔で蕎麥屋を出た。

西に傾いた太陽はもう眞夏のやうな偉力を投げてゐる。單衣一枚でも多少暑い位だ。宮井は泥濘んだ横町を當所なく彷徨ふて、不圖下谷萬年町の標札に眼を止めた。此處だなア、音に聞えた貧民窟は。面白い！ 一つ行つて見やうと、今まで鬱ぎこんでゐた彼は、卒に元氣づいた。此の邊の活動は盛なものである。戸井端に半裸體の女が米を磨いでゐる。顔を墨だらけに彩つた男が喇叭を吹いて、子供に飴を賣つてゐる。羅宇しかへの笛がビユと鳴つてゐる。豚小屋に近い家には葦簾を垂れて、大抵何か内職をして

ゐる。宮井は豫期しなかつた興味を覺えて、つい深入りしたが、さてどう出て可いか解らない。餘儀なく四つ角に佇んでゐると、狭苦しい路次から肩物を山のやうに積んで、車を曳いて來た年増の女があつた。が、溝板に引懸つて、容易に上らぬので困つてゐる。それで彼は兩手に満身の力を入れて、グイと越させてやつた。女はにつと卑しい笑ひを洩して、嬉しさうに行つた。けれど宮井は其の報謝の仕方には、些とも介意しなかつた。油然清々しい快感を覺えて、他人の爲めに働く幸福を悟つた。自分の成すべき事は是れだ。些細な勞力でも自分自身へ無限の喜悅を與へてくれる。而して此の邊になら、自分の仲間も随分ある。若し基督が東京の地に現存して居られたら、先づ來られさうな處だと、突飛な想像を浮べた。

### 八の三

宮井は牧師の長男の葬式に列しやうと教會に來たが、丁度柩の墓地へ向ふ時であつた。今日も亦雨天なので、會葬者の混雑は一通りでない。傘を降すやら、俥に乗るやら、電車で失敬する人もある。彼は其處に居合はした若槻に見附けられて、話込まれつゝ歩くことになつた。彼は哀歌を送つたと云つて聴かした。

「……………『行末は聖ならめと祈りしも、餘り早さに涙こぼる』……………其れから、『哀別の涙を何どか流すらむ、光の御子に生れしものを』……………もう一つは、『朝な夕汝を抱きし我が胸の、宮となりにし今日の嬉しむ』……………どうかね。」と稍得意である。

「中々信仰的ぢやないか、それでゐて君は宗教を貶すが怪しいな。」  
「只僕の因襲が言はすのだね。早く全然解放されないぢや困るせ。」

「何故？」

「主観的情緒に生命はない。」

「でも主観は客観があるから、存在するのだらう。」

「そんなことア解りやせん。無いものは無いね。」

「いや、有るものは有る。」と宮井は早口に云つた。

雨は意地悪く降つて、時々風が混る。半町程先に母衣の掛つた俵が廿臺ばかりと、其の前後に雨傘や洋傘がばら／＼動いてある。廻り角で板擔つぎの人夫の足並が見えた。

「ぢや君は飽まで宗教を棄てぬ積りかい。」

「あ。」

「まだ理想に未練があるんだな。」と冷かに笑ふ。

「そりや詮方がないよ、僕は君等のやうに、風流な生活を娛む譯にいかぬから。日の暮れた獨旅は目的でも定まらなけりや、到底道切れない。」

「旨く云つてるせ、可矣、それぢや其の抱負で理想を遂行したまへ。己の如く汝の隣人を愛してゐるのなら、格別悪くはない。けれども君は丸で自己を滅却するのだらう。自然はそんな弱者を顧ぬよ。何うしても此の世界では、極力自己を主張して、自然に對抗して行く者のみ生存に適してる。假令ばね、鯨は一吸ひに無数の鱈を呑んで、自分の腹を肥すが、より強い人間には殺されるぢやないか。其のまた人間もより強い大濤には溺らされて了ふ。而して自然の海は人間の五萬や十萬沈めたつて、平氣な顔で洋々としてるから厭になる。何處に弱者を憐む眞理があるか、聴きもんだね。

「或は君は生命を失ふ者は之れを得るとか、我れ弱きに於て誇らんと保羅

は告白してるとか、頑固に出るかも知らんが、其れは要するに舊時代の福音だよ。我々の生命が最早空想界に支へられぬ以上は、天國があるからって自暴に信じて、此の二つとない生命を否定した處が役に立たん。善が成したけりや、善其れ自身のためにするが可いさ。だけれども人間はもつと惻愴に出來てるせ。現にクリスチャンの生活がさうなつてるのを君は考へんか、初代の教會と今日の教會とは霄壤の差がある。近世の新神學を中世紀以前の人に云はせたら、一言の許に異端者の外道だよ。だが此れは人類自然の要求だから、大勢止むを得ない。人間の努力が漸々此處まで滲附けて來たのだ。未だ讀まぬのなら、イブセンの「ブランド」でも味つて見たまへ。僕等には最早第三王國の福音よりかありませんよ。

「斯う云ふ僕は君等と異つて、子供の時から宗教的空氣に包圍されてゐる。だからそら一時は非常に熱中したもんさ。早稻田(大學)を止めてまで神學校へ入つて、行々は臺灣の生蕃へ傳道に往く積りだつたツけが、到頭こんななされて了つた。併しながら、僕は其れを些とも悔まない。眞面目な信仰が教會で躓かされるのは、寧ろ自然の成行だらうよ。彼等だつて、矢張近世の人間なもの。別に不思議もなければ、無理もないさ。だからね、君も奮勵一番弱者の境涯を脱したまへ。でないと、君は現に殺されつゝあるのだせ。」と鋭い眼で憐れむやうに彼を胸した。

宮井は餘りのべつに饒舌られて、半ば茫然しながら、

「どうしたら、可いんか。」と呟いた。片袖は雨でびつしより濡である。

「先づ山邊の處へ談判に行くのだね、女には負けて勝つ手が間に合はぬから、次第によつちや、ビストルを向けるのさ。」

る。だからそら一時は非常に熱中したもんさ。早稻田(大學)を止めてまで神學校へ入つて、行々は臺灣の生蕃へ傳道に往く積りだつたツけが、到頭こんななされて了つた。併しながら、僕は其れを些とも悔まない。眞面目な信仰が教會で躓かされるのは、寧ろ自然の成行だらうよ。彼等だつて、矢張近世の人間なもの。別に不思議もなければ、無理もないさ。だからね、君も奮勵一番弱者の境涯を脱したまへ。でないと、君は現に殺されつゝあるのだせ。」と鋭い眼で憐れむやうに彼を胸した。

宮井は餘りのべつに饒舌られて、半ば茫然しながら、

「どうしたら、可いんか。」と呟いた。片袖は雨でびつしより濡である。

「先づ山邊の處へ談判に行くのだね、女には負けて勝つ手が間に合はぬから、次第によつちや、ビストルを向けるのさ。」

「そんな馬鹿なことを……………」  
 「いや、全くだよ、どんな女でも大概グイと引張られて来るものさ。と云つてね、君のやうにさう恐怖心に驅られてゐちや、柳原の裏天だつて、御免遊ばせとほざかうせ。は、は、は、何も不安動搖は其の儘で可いちやないか。若し君が正々堂々と切込んで行つたら、屹度山邊は喜ぶよ。」  
 「うんにや、喜んでくれん。そら僕も随分努力したつけど、丸で受附けないのだ。」

「そりや彼の時にや、君と何とか云ふ女との關係を疑つたから、あゝ嫉妬的に出たのさ。だがもう時機は來てるよ。餘り捨て、置くとね、君が怒つてゐやうとか、愛想が盡きたらうとか、色んな邪推を起さして、結局悪感情で審判かれて了ふ。それちや君、残念だらう。」

「併し僕は山邊さんを幸福にするだけの資格がないから、斯うしてゐるのが愛の道だらうと思ふ。……………」  
 「おい〜。」と捲しかけて、

「もうそんな弱音は止せつたら、口を酸ばくした張合もありやしない。悉皆君の僻みだよ。境遇の壓迫に負けちやつて、自分の掘つた穴へ埋まつて行くのだ。」

「奈何だか知らんが、君の所謂弱者には違ひなからうよ。」 宮井は到頭反感を抱かずに居れなかつた。

「ちや最早愛の報いも望めんのだなア。そんなに凋落したンかい。」  
 「望んだつて、得られないもの。」と捨鉢である。

「そしたら、憎め！ 君!! 自己を主張して、仇を返せ!!!」

「厭なこつたア、僕は憎むくらゐなら、其の人を愛するよ。埋もれたつて構はない、地獄の最底でも生きて見せるから。」

「ふん。」と若槻は癢に觸へた。

其れつきり言葉を交さないで、彼は肩を怒らせつゝ前の群に投じた。後に残された宮井は流石にほろりとした。而して日外多羅尾に我意を通すと詰られたが、今度は自己を主張しろと逼られる。もう奈何して可いのか解らないと、彼は茫然滅入りこんだ。けれどもさうはして居れない。彼等は既に青山の墓地へ入つてゐたのである。

洋服で来た若槻は身軽だが、彼は下駄を壁土に喰はれて、殆々難澁する。

要垣などに便つて、おつかなく歩いてゐると、不圖「大澤英一之墓」と刻んだ大きな花崗石の墓標が眼に止つた。嗚呼、此處だと、彼は歴屈む程慄

然して、只もう泣きたさうに少時佇んだ。けれど辛々我れを支へて、一人の死がどのくらゐ強い影響を有つてゐるか解らない。牧師も嘸嘆かれるであらうと、沁々思ひながら將に始らんとする埋葬の式に連つた。

比較的明るいが、空は一面に搔曇つて、宛然薄墨を流したやうだ。血腥いやうな心地のする風は習々吹いてゐる。大小高下色んな形跡を遺めた木標石碑の上には細雨が朦朧と降りかゝる。此の悽愴な天地を背景にして、百名ばかりの會葬者が墓邊に愁然集つてゐる。やがて一齊嚴肅に讚美歌を唱ひ出した。

一 主はをさなごを、すくひたまひけり、

いまはなやみの、あとだにといめす、

御手をふしどに、やすく寝ぬめり。

二 うき世のかせに、まかすをおしみて、  
 主はのどかなる、あまつふるさとに、  
 いとしきものを、うつしたまひぬ。

\* \* \* \* \*

歌へない宮井は凝然と耳を澄してゐたが、其の讚美歌の響きが人間の死に對する恐怖心を拭ふてゐるかのやうであつた。而して彼は近くに花子のゐたのに氣附いて、夢のやうな懐しさを感じた。傘の雫がぼたり／＼彼女の帯へ滴つてゐるので、汚染にならねば可いかと案じてやつた。けれど其れは死者に禮を缺くと思つて、束の間に消した。八重子がひたぶる泣惑ふて、訣別を惜む様は如何にも同情に餘つた。

柩は穴の中に卸されたのである。人夫等は業務に勤しむ積りにや、仍なく土を落した。其のドソ／＼棺に當る音が恰も電氣のやうに、宮井の心臓に應へて來た。で、もう其の邊に眼をやつて居れなかつた。彼は母の病死、父の憤死、姉の横死、餘りに多くの骨肉を手づから葬つてゐるので、無限の悲痛に打れざるを得ないのであつた。

### 八の四

久振りて宮井は安息日の禮拜に出席した。目下改築中のことゝて、倉組な古い會堂だが、續々人は集つて來る。彼は末座の方の窓際に腰掛けて、専心黙禱に首垂れた。祈禱の外に最早彼の隱家はないので、昨夜も今朝も戸山の原の森へ行つて、蚊に刺さるゝも意とせず彼は祈つてゐたのだ。する

と惱み多い胸の鬱結は幾平解けて、幽かな希望の星は煌めく。茲で一つ確かな實驗を得たら、東雲の空は明放れて、花笑ひ鳥歌ふ麗かな天地が展けて来さうに思へる。それで彼は、宗教の眞髓は祈禱にあると信するやうになつた。是れを怠つてゐたから、色んな誘惑に罹つたり、疑義に陥つたり、無暗な批評を敢てしたが、自分が直接神に見えて、祈禱に安んじてる以上は、何物も恐るゝに足らん。只其の確信を得たいと、曾て加へられた信者の壓迫をも忍んで、會堂へ出たのである。

和田牧師は馬太傳六章の三十三節を題にして、まづ神の國と其の義とを求めよと、諄々説き進む。宮井は何うか然うありたいと思ひつゝ聴いた。普通なら此頃は、愁然として居られる筈の牧師が倦ます道を傳へる熱心さには、甚く動かされた。彼はクリスチャンの神の國に對する觀念の薄いの、

を指摘して、お互にもツと善くならねばならぬと祈禱を以て説教を終つた而して牧師は講壇の前の卓子の處へ来て、

「是れから皆様と俱に、聖晚餐に與るのでございますが、此れは洗禮をお受けなすつて、主にある兄弟姉妹の交際をしてゐらつしやる者のみを守る靈典でございますから、どうぞ其の他のお方は、パンと盃に手をお觸れなさらぬやうに願ひます。勿論誰方でも此の場にお出でなすつて宜敷ございしますが、若しお歸りなさるお方は、今唱ひます讚美歌の濟んだ時に、靜に御退席を願ひます。」と一座に注意を與へた。

宮井は其の時考へた、成程今日は七月の第一日曜日だから、晚餐がある。けれども自分は單に教會員の名義が残つてあるだけで、些とも兄弟姉妹の交際はされて居らん。何日缺席してゐても、——其れも信者に虐られてた



—— 誰一人訪ねてくれる者もなげりや、斯う出て来ても、言葉を変はす人すらない。こんな精神の伴はぬことで、徒に儀式を守つたところが何になるもんか。そりや自分も献金一つしないのであるが、またどんなに威嚇されるか分らぬから、これは歸つた方が可からうと。云ふまでもなく其の心の内には、非常な寂寥があつた。

一同は既に讚美歌を唱つてゐる。宮井も遅ればせに立ちあがつた。其の刹那！ 彼は讚美歌の本を持つた右の手がグイと引上つたやうに感じた。其れが奈何した理由だか一向解らぬが、事實宮井は清々しい感興に満たされた。自分は此の方に便つて、獨立躬行の信仰を抱いて進むと、彼は欣然として會堂を出た。

「嗚呼、是れだ、自分の永らく求めてゐたものは是れだ。此れが神の聖靈

なんだ、インスピレーションだ。……………。」など、狂喜して宿に歸つたのである。

歸宅後彼は靜に自分を省みたが、右の手の引上つた或る力の感興は去らなかつた。二日経つても、三日経つても、矢張片腕が痒いやうに感じた。そして彼は今迄成すまいと思ひながら爲た事に打勝てるやうになつて、勝利の喜悦は次第に胸中に溢れて来る。茲に於てか、宮井は過去の逆運が無意義でなかつたと云ふ事を悟つた。抑も秘露邊りへ行つたのが異常な經歷なので、凡ゆる艱難辛苦を嘗め盡して、到頭揚句の果てには、監獄の地下室へまで投込まれた。其の目も當てられぬ悲惨な生活の内に、自分は靈妙な一路の光明に接した。基督は自分の窮境を支へて、死を免らしめて下さつた。自分の一切の運命は、神が自分を救はんための攝理だつたのだ。

斯くまでに色んな打撃を加へて、此の鈍い自分の靈魂を覺醒したまふたとは、實に感謝の外はない。自分は何の價値もない人間なのに、永遠の救ひに入る可く豫定されてゐたの？ お、神よ。僕の過ぎにし不信仰を赦したまへと、懺悔すると共に、歡喜の涙を流すのであつた。かくて宮井は久しく憬れた新生命を得た。従つて人生觀も宗教的に定まつた。けれど其の新しい生命は僅に産聲を揚げたのみだ。で、彼は將來の天職を自覺せねばならぬと同時に、信仰の基礎を理性に築いて、社會の風潮に靡かぬやうにせずばなるまいと思つた。そんな要求に逼られて、宮井は日々圖書館へ通ふやうになつた。幾ら暑い三伏の日でも、彼は毎日上野へ出掛けて、色んな書籍を讀む。敢て宗教書に限らない。今では英雄偉人の傳記を味ふ餘裕もある。寧ろ其の

方で多くの暗示を與へられた。凡の事は神を愛する者の爲に悉く働きて益をなすの信仰から、意を得たものなら、何でも海綿のやうに吸込んで、一種の見解を下し得るだけの頭腦が稍出來た。其の歸途は毎も萬年町へ廻るのが例である。宮井は貧民の友になつて、神の祝福に報謝したいと云ふ觀念を只管高めた。事業の或る計畫が自然に腦裡へ浮ぶのであつた。さうかうする内に宮井は、以前彼の麴町區役所にゐた時分、屢々雇はれて來たる老人に邂逅つた。今は貧民窟の真中で、見る影もない古物商を營んでゐる。彼は色々物語の序に、其處の息子が何處か海外へ移住したがつてゐるのを聞いた。そんなら、自分が周旋してやらうと、宮井は喜んで引受けた。

## 八の五

「今、君の社へ行つたら、此處に家を持つてると聞いたから、……………」  
 「さうか、よく来てくれたね、馬鹿に久振りぢやないか。」  
 宮井は多羅尾に導かれて、小瀟洒した座敷へ通つた。沁々平素の無音を詫  
 びて、彼が別に悪感情を抱いてゐない様子を見て、宮井は甚く喜んだ。移  
 民の用件に就いて、相談に來たのである。  
 多羅尾の談話に依ると、去る六月頃郷里の母が、親戚の娘を連れて上京し  
 て、是非に妻帯を逼つたので、到頭こんな新家庭を作つたとの事である。  
 餘り廣い構造ではないが、蓄財の富饒な男だけあつて、流石に閑靜な居心  
 地の可い邸宅だ。ニコライ堂の塔が前の家の棟に聳えて、西日は目映く射  
 込んでゐる。軒端には伊豫籠を懸けて、涼しさうな岐阜提灯がぶら下げら  
 れてあつた。

「一度君に知したかつたつけが、丸で行方不明なものなア。」

「いや、全く申譯がない。どうぞ君、許してくれたまへ。」と云つて、彼は  
 面目なげに頭を掻いた。

其處へ花嫁が羞澁みつゝ茶を煎れて來た。

「何分僕と同様に……………」と多羅尾は紹介をして、

「僕のやうな出稼人はね、別嬪の女房は禁物だつて、宛然奥山の猿さ。」と、  
 二人がもぢく無言の挨拶を交してゐるに、斯う浴せかけた。

花嫁は猿以上に顔を赧めて、絶入らぬばかりに逃げて往つた、頭の重さう  
 な丸鬘に結つて、中形の粹な浴衣に博多の單帯を結んで、そつと白粉を塗  
 つてゐるが、腰の周圍の太い只々實用的な夫人である。

宮井は頗る奇異の感に打れた。四十になつたら、十七八の美人をと口走つ

てゐた多羅尾は、全然豹變してゐる。然も満足さうな容貌で、バク／＼煙草の輪を吐きながら、

「もう君も同棲になつたんだらうね。めッきり男振りが上つてるせ。はアは……」大きな聲で笑ふ。

「そんなことがあるもんか。」と躍起になつて、宮井は早速要談を持出した。而して彼は近日萬年町へ引越して、其處で米麥味噌醬油などの日用品を商ふ心算でゐる。是れからは、彼の邊の見込みのありさうな人間を君の方へ導いて、聊か多年の鴻恩に報いる積りだ、秘露の移民には、純粹な労働者が適當ではないかと云つた。移民問題は嬉しく聞いたが、多羅尾は今更のやうに彼の眞意を不審がる。

「餘程訝しいね、君は。」

「何故？」

「何故ツて、貧民窟へ開店もないもんさ。」

「或はさうかも知れん、けれども僕は僕一流の商業法で行るのだから、所謂成功は些とも眼中に措かん。敢て自己の利益を計るぢやなし、それかと云つて、事業夫れ自身の爲めにでもないし、其處は一寸君の賛成を得る譯にいくまいよ。」と意氣冲天の態度である。

多羅尾は冷かに頷いて

「ぢや矢張山邊との戀も味噌附けたんだなア。」

「戀？ そんなものは往時の夢だ。」と流石に聲を震はした。

「それでも未だ教會に關係してるンか。」

「あ、只日曜日の禮拜にだけは行く。」

「そりや何うも困るね、君のやうに爲るに及ばぬ失戀をしちやつて、さう拗戻者になつてちや、詮方があるまいぢやないか。そら商賣は結構さ。多少常識に基いた話しなら、随分取引上の便宜も與へてやるが、薩張正氣の沙汰とは思へぬせ。」

「君に云はせたら、或は然うだらう。だがもう其れは合してくれたまへ。」

「さうも可かんよ。君は今どのくらゐ資本がある？」

「二百圓程残つてる、寢醒の悪い金銭が。」

「金銭に二重はないさ。併しそれツばかりぢやものにならん。」

「ならなくつても可い、此れは君に云ふのぢやなかつた。僕は失敬する。」

「まア、悠くりしろよ。久振りで夕飯でも一緒に喰はう。」と云つたが、多

羅尾の顔には抑へきれぬ不快が現はれた。

彼はどぎまぎしながら、

「難有う、何れまた御馳走にならう。ではね移民の件は宜しく頼むよ。」

「うん、其の内に手續をしやう。」

「そして、……………若し豊子に會つたらね、僕はもう此の世の人間ぢやな

いつて、……………」宮井は思はず涙含んだ。

「君は泣いてるぢやないか。」

「うんにや。」と立ちあがる。

「何うしても歸るのか、是れから君は何處へ行くね。」

「甲武線で大久保の方へ歸るのだ。」

「そんなら、お茶の水で暫時待たんか。僕も彼方に用があるから。」

「其れでは向ふで待つてるよ。」と約束して、彼は多羅尾の家を出た。引込

んでゐた花嫁も、町噂に見送りをしたのである。

## 八の六

宮井はつい近くのお茶の水驛へ来て、プラットホームの腰掛に首垂れた。嗚呼、八月も最早二三日だ。來月になつたら、いよいよ畢生の事業に着手にやならぬが、自分のやうに斯う孤立では心細い。此れだつて、多羅尾の助力が藉りられるのなら、非常な便宜はあるけれども、丸で思想が合はぬのだから、どうも仕方がない。而して彼の云ふことにでも、若槻の議論にでも、確に一面の條理が籠つてあるので、案外動かされる。自分も幾度かそんなに考へてゐたのだものと、宮井は遺漸ない感慨に襲はれた。

……………、一體自分程人の愛に背かれてゐる者はあるまい。此れが爲

めに、毎も常軌を逸した行動を取らねばならぬ。誰が好んで貧民の仲間入りをするもんか。けれど今と成つては、其の外に自分の安らぐ住家は失へた。若し山邊が自分を愛してあゝ誓はしたのなら、自分の心だけ奪つて置いて、何故彼の儘振棄てた？ もう避暑地から歸つたと見えて、つい此の間教會への歸途に計らず出會つたが、悪さうな顔色で黙つてゐた。他の信者とは極く親密にしてゐながら、自分へは冷酷に當るのだから、手も足も出やしない。假令少しでも愛があるなら、信仰に依つて、和ぐのがクリスチャンの道ぢやないか。……………、いや、此れは皆誘惑だ、誘惑に打勝つのが自分の唯一の事業だ。自分は神の力に信頼して、献身的に企てたのだから、其の事業に友人の補助を仰ぐ必要は敢てない。山邊のことだつて、何も憤るに當るまい。自分が妙に豊子を避けて、彼女の方へ赴いたの

だ。其れは無論色んな侮辱を受けたが、彼女の壓迫は事實自分の祝福になつた、只遺憾なのは、自分は微塵も悪感情を抱いて居らぬのに、如彼離間されてゐる一事だと、宮井は様々信仰的に考へてゐた。其の間に来る程の人は、段々電車に運ばれて行く。

四邊に燈火が點いた。待ち倦まされた多羅尾は漸々出て来た、思ひがけない豊子を連れて。彼は愕然したが、直に度胸を据ゑた。多羅尾は未だこんなことをするのか、奈何云ふ積りか知らず、疑ひつゝ平氣な顔で、三人は一緒に電車に乗つた。勿論豊子とは言葉を交さない。多羅尾が其の中間に座を占めてゐる、宮井の心では、多羅尾がゐるのなら、一番日頃の所信を披瀝して、自分の立場を明に爲やう。抑も彼女は自分を賣つて、他人の妻になつたのだ。其れを自分は愛のために如彼許して、自由を與へたのぢや

ないか。それに斯う附纏ふのは、餘り無理だ。だから精神的には愛するが、最早肉に於いて親しむ譯にいかん。能ふべくんば、彼女に基督の福音を傳へて、永遠の生命を得させたいと、思ふのである。

電車が水道橋へ着くと、何か豊子に囁いてゐた多羅尾は、

「確り頼むせ。」と宮井の膝を叩いて置いて、早々降りやうとする。

で、彼は落膽した。多羅尾に去られては、杖を失ふた盲人だ。降口まで跟いて行つて、

「多羅尾君、そりや困るよ。」

「何有、僕がゐるとね、君は堅くなるから。」と逃ぐるがやうに降りた。

夕日の餘波は電車の向ふ方に薄すり残つてゐる。宮井はどうにも舊の場へ復りかねて、豊子にはすつと放れた反對の側へ腰掛けた。乗合ひはさう込

んでゐないので、彼女の憐みを乞ふやうな容貌が直ぐ眼に附く。何んでこんな距離が出来たのであらう？ 彼女と同席するのは、四五年振りだが。彼は餘程近寄らうとした。けれど其處に犯し難い障壁があるのだ。強ひて過去を喚起さうとしても、其の情實は全然消え失せて、只々彼女の前途が案じられる。多分病院にゐたのだらうが、困つたもんだ、………と恐ろしく窺くと、豊子は恨むが如く睨んでゐた。それでも宮井は少時凝視めたが、すると彼女の陰鬱な黒雲は幾平晴れる。彼は長嘆して萎然首垂れた。

噫、花を欺いた豊子を見る影もなく篋れてゐる。若し境遇の迫害に打勝つてゐたら、二人は楽しく世を送つてゐやうに、彼女は其の不義理を自覺して、斯う退いて居るのであるまいか。實に人生の半面は残酷だ。是非共彼

女を靈的に生かさにやならぬが、其れが自分に出来るだらう？ 往時の戀人を救ひたさに、却つて陰府に陥つた聖者があると、宮井は涼しい風の入る窓に凭れて、狂はむばかりに祈らうとした。けれど幾ら焦つても、悶へて見ても、何處からとはなしに、力強い或るものが溢れて来て、到底祈禱をする餘地がない。而已ならずふんと無意識に笑つた。周囲の人が變に感じるだらうと云ふ氣を同時に起した。で、彼は最早自失して了つた。電車は四ツ谷驛に着いた。花子が其處へ偶然乗込んで、びつくり避易いだ。而して豊子と稻妻のやうに睨合ふ。宮井は彼等二人の手を握らさねばならぬと思つた。淡い希望の影が彼の頬に現はれた。ぶつと電車は出た。



# 相愛記終

明治四十二年十一月廿二日印刷  
明治四十二年十一月廿五日發行

相愛記奧附  
定價金六十五錢

發行者兼

黑瀨才二  
東京市神田區裏神保町三番地

印刷者

內藤聲次郎  
東京小石川區久堅町百八番地

印刷所

博文館印刷所  
東京小石川區久堅町百八番地



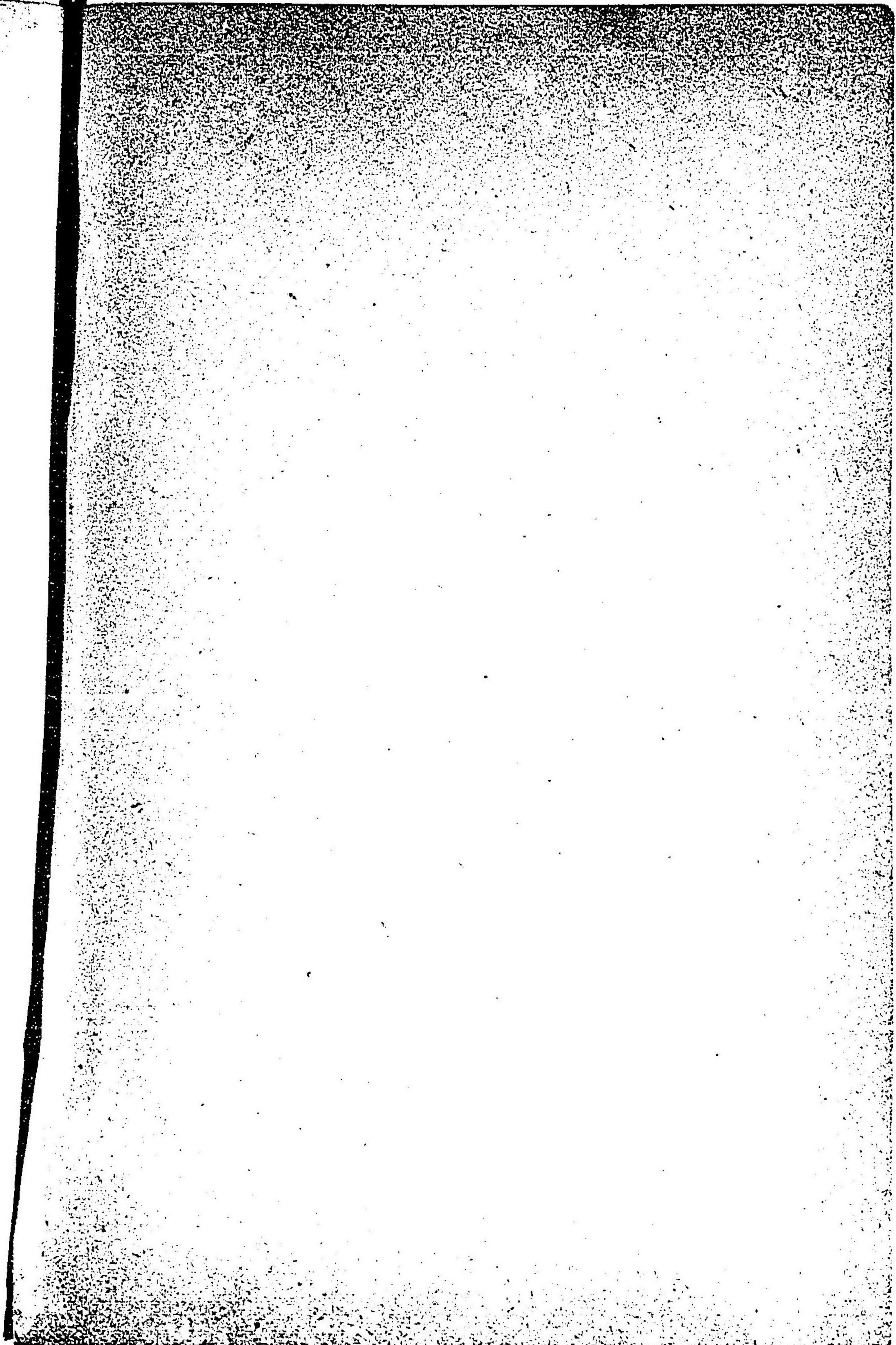
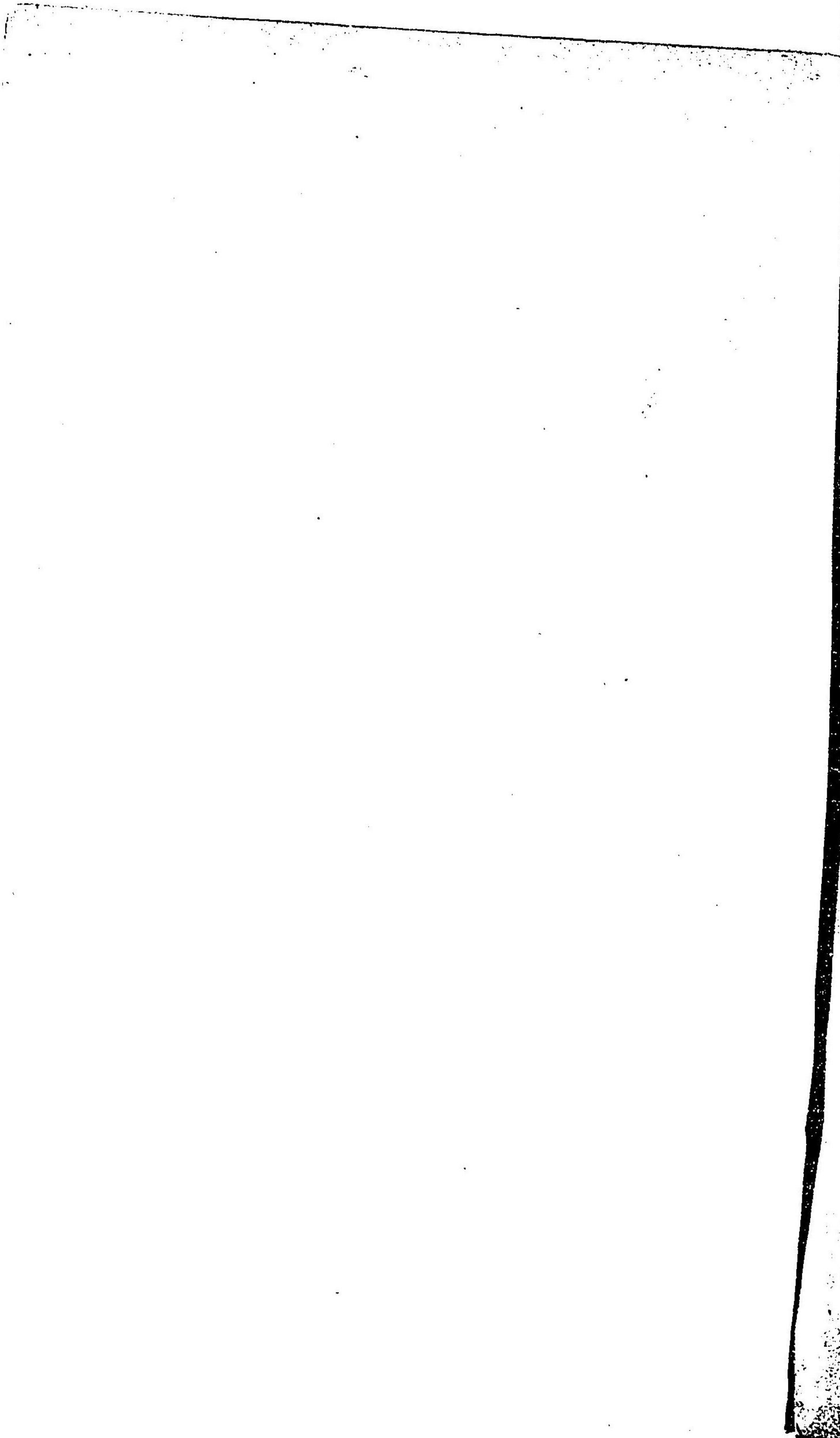
## 發行所

東京市神田區裏神保町三番地

書肆

## 興樂房

(振替口座東京四四九六〇)



259  
750

